

第66集

# 研究紀要

三好教育研究所

令和7年(2025)年度

## ごあいさつ

寒さの中にも、日ごとにやわらかな陽光が差し込み、校庭の木々の芽吹きに春の訪れを感じる季節となりました。会員の皆様におかれましては、年度末の御多用の折にもかかわらず、ますます御健勝にて御活躍のことと、心よりお喜び申し上げます。

平素より、三好教育会の活動に対しまして、深い御理解と温かい御支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本教育会と三好教育研究所では、本年度（令和7年度）より研究主題を「VUCA 時代を乗り越え、心豊かにたくましく生き抜く『人財』の育成」と定め、継続的な研究を進めております。社会が先行きの見通しにくい状況にある今こそ、子供たちが自ら考え、仲間と協働し、そして自分の人生を力強く歩んでいくための教育の在り方が、私たち教育に携わる者に問われています。こうした課題に真摯に向き合い、未来を担う子供たちのために、よりよい教育の実現を会員の皆様とともに目指してまいりたいと思います。

本年度は、令和7年8月21日の「三好教育研究発表会」において、芝生小学校と三好教育研究所に、これまで取り組まれてきた研究の成果を御発表いただきました。

○自他を認め合い、多様な社会を心豊かに生きる子どもの育成

～人・人・人とのつながりを通して～

芝生小学校 平尾 美和 教諭

○別室登校の生徒たちの実際

～アートセラピー的取組とそよかぜ学級～

三好教育研究所 井川 早苗 研究員

どちらの研究も、学校の特性や発表者の研究目的に応じた熱心な研究がなされ、素晴らしい実践と成果が報告にまとめられていました。2年間にわたり積み重ねられた実践は、学校や先生方の今後の教育活動にとって、大きな示唆を与えるものとなったことと思います。

研究発表の後には、合唱作曲家の弓削田健介様に「いのちと夢のコンサート」を開催していただきました。いのちのつながりや名前の幸せを願う気持ちなど、先生の歌とお話は、子供たちへの思いや教育の原点を改めて気付かせてくださる、心温まるひとときとなりました。

この研究紀要は、各学校に配付させていただくとともに、三好教育研究所のホームページにも掲載をしておりますので、ぜひ御活用ください。

最後になりましたが、本研究紀要の発行にあたりまして、御指導、御助言いただいた先生方、研究協力校並びに委嘱研究員の先生方、三好教育研究所の皆様、そして関係各位に心より感謝申し上げます。会員の先生方の教育活動が今後ますます充実し、成果を上げられますことを祈念いたしまして、あいさつとさせていただきます。

令和8年3月

三好教育会長 山下 恵

## 目 次

あいさつ

三好教育会 会長 山下 恵

### —— 研究指定校研究 ——

- 自他を認め合い、多様な社会を心豊かに生きる子どもの育成 …………… 1  
～人・人・人とのつながりを通して～

芝生小学校 教諭 平尾 美和

### —— 教育研究所研究員研究 ——

- 別室登校の生徒たちとのつながりづくり…………… 11  
～アートセラピー的取組とそよかぜ学級の実際～

三好教育研究所 研究員 井川 早苗

- よりよい「振り返り活動」を目指した学習活動の工夫…………… 22  
～小学校家庭科学習における実践～

三好教育研究所 研究員 大倉 尚子

- 既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～）…………… 33

## 研究主題

# 自他を認め合い、多様な社会を心豊かに生きる子どもの育成 ～人・人・人とのつながりを通して～

三好市立芝生小学校 教諭 平尾 美和

### 1 はじめに

本校は創立145年を迎える伝統校で、南は吉野川、北は讃岐山脈に囲まれた三野町の平坦部に位置している。三野町には、先人の功績である三村用水や徳島県天然記念物となっている中央構造線露頭があり、徒歩圏内には三好市役所三野支所、三野図書室、三野公民館などの施設や三野認定こども園、三野中学校がある。地域の方々は、交通指導など、日々子どもたちをサポートしてくれており、豊かな教育資源やあたたかい地域の方々につつまれた素晴らしい環境にある。



### 2 研究の目的

本校は「自他を尊び ともに学びあい ともに支えあう 知・徳・体の調和のとれた子どもを育成する」ことを学校教育目標としている。また、本年度は「学校だいすき100%～どの子にも笑顔、よろこび、希望があふれる学校に～」を学校経営基本理念として、子どもたちが毎日楽しく活動できる学校をめざし、教育活動を進めている。

本校の児童数は95名で、元気で素直な子どもが多く、学年に関わらず仲良く遊ぶことができる。与えられた課題や仕事に対して、根気よく取り組むことができる子どもも多い。

しかし、その一方で、生活経験が少なく、何事も受け身で、自分の考えや思いを伝えることが苦手な子どももいる。また、自分に自信が持てず、悩みや不安感があり、なかなか学校へ来づらいという子どもや、様々な特性を持ち、細やかな配慮や支援を必要とする子どもも多くなっている。

このような本校の実態から、「広い視野を持ち、自分の考えや思いを様々な方法で伝え合うことができる子ども」「自分のよさに気づき、自己肯定感を高めるとともに一人一人の個性を認め合うことができる子ども」の育成をめざすことを、教職員間で共通理解した。

そして、その実現のために、いろいろな人と様々な活動を行うことを通して、多様な考えや思いに触れ、自分をしっかり見つめる力を育てることが大切だと考えた。

そこで、様々な得意分野をもった地域の方々やゲストティーチャーから学んだり、こども園や他の小学校の友だちと交流したり、自校で互いに学び合い認め合う活動を充実させたりするなど、たくさんの人と関わる取り組みを通して、「自分に自信を持ち、一人一人の個性を認め合いながら、思いやりを持って、いきいきと生きる子どもになってほしい」という願いを持って、本主題を設定し、研究を進めた。

### 3 研究の実践

#### (1) 地域の方々・ゲストティーチャーとのつながり

##### ①手話サークルのみなさん

三好市は徳島県で初めて、「手話言語条例」が制定された市である。

本校では、以前から手話を通して人権学習を行っていたが、ここ数年は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、その活動がストップしていた。そこで、学期に1回、クラブ活動の時間に地域の聴覚障害者の方や手話サークルのみなさんをお招きし、4・5・6年生が一緒に学ぶ手話学習を再開させることにした。

手話サークルのみなさんからは、歌や名前、あいさつなどを、手話で表現できるよう教えていただいた。また、地域の聴覚障害者の方からは、実体験にもとづく話をたくさん聞かせていただき、相手の思いを知り、寄り添うことの大切さを学んだ。

これらの学習から、「声で発する以外にも自分を表現する方法はたくさんあるんだ」ということや、「手話や指文字を使うと、耳が不自由な人だけでなく、上手く話すことができない人ともコミュニケーションをとることができるんだ」ということに気付くことができた。人権集会や学習発表会の機会に全校児童で手話歌を発表したり、学習発表会や卒業式の台詞を手話を使って表現したりするなど、4・5・6年生の活動が全校での活動へとつながった。



##### ②お年寄りのみなさん

4年生は、総合的な学習の時間に高齢者学習を実施している。

三好市社会福祉協議会の方々との高齢者体験では、身体が上手く動かせなくなる大変さを体験した。お年寄りのみなさんの気持ちに寄り添うことの大切さやサポートの重要性について学ぶことができた。

地域の老人介護施設（長生園）への訪問ではその体験を生かし、どのように接すれば喜んでいただけるかを考えて交流の計画を立てた。お年寄りのみなさんが喜んでいる表情を見て、自分たちの活動がその笑顔につながっていることに気付くことができた。

パークゴルフ体験は、お年寄りのみなさんに教えていただく活動だった。グループごとに分かれてルールや打ち方を教わりながら、一緒にゴルフを楽しんだ。

また、活動の合間に、地域のことや昔のお話をしていただいた子どももあり、「たくさんを知っているんだな」「いろいろな経験をしているんだな」と学ぶことがたくさんあったようだ。



このような交流を通して、「おじいちゃんやおばあちゃんがいるから今の自分たちがいる」という命のつながりに気づき、「家族だけでなく、地域のお年寄りのみなさんも大切にしたい」という思いを持つことができた。

### ③図書館ボランティアのみなさん

三野図書室の図書館ボランティア「青い鳥」のみなさんが読み聞かせやミニ読書集会をしてくださっている。昨年度は、図書委員会と合同で読書集会を開いた。

図書委員会の子どもたちは、読み聞かせのポイントやペープサートの仕方を教えていただいたり、お話に登場するダンスを練習したりして準備を進めた。

集会では、「青い鳥」のみなさんと一緒に、様々なジャンルの本を全校のみんなに紹介し、楽しんでもらうことができた。

その後、図書委員会の子どもたちは、図書室の本をたくさん読んでもらおうと読み聞かせをしたり、読書クイズを考えたりして、主体的に活動する姿が見られた。

また、「青い鳥のみなさんみたいな読み聞かせができるようになりたい」と手紙を書いたり、三野図書室へ本を借りに行ったりする子どももおり、相手に伝わる表現をしたいという思いや読書への関心の高まりを感じる事ができ、心の豊かさにつながった。



### ④阿波踊り連のみなさん

阿波踊りの「もみじ連」のみなさんに、5・6年生が運動会で実施する阿波踊りを教えていただいた。

6年生は、これまでに指導していただいたことを生かして、新しい隊形に挑戦したり、5年生をリードして大きなかけ声を出したりすることができた。また、前年度はもみじ連のみなさんに頼っていた鳴り物も、ほぼ子どもたちだけで演奏することができた。普段は自分に自信が持てない子どもが、「踊りは苦手だけれど、鳴り物ならがんばれるかも」と一生懸命練習し、楽しそうな表情で演奏している姿も見られ、自己肯定感の高まりを感じた。

丁寧で熱心なご指導とあたたかい見守りのおかげで運動会当日には、身体や音で自分を表現することの楽しさを感じながら、いきいきと成果を発揮することができた。最後は会場のみなさんを誘って乱舞を披露し、つながりを感じる事ができた。



### ⑤ゲストティーチャーのみなさん

三野町には様々な分野に詳しいスペシャリストがたくさんいらっしゃる。そのような方々をゲストティーチャーとしてお迎えし、学習をした。

3年生は、昆虫について教えていただいた。子どもたちの興味・関心が高まるよう、実物や標本を用いてさまざまな視点から教えてくださった。子どもたちは専門家のような視点で観察したり、毎日愛情をこめて、教室で飼っている昆虫のお世話をしたりすることができた。実際に見たり触ったりする活動をし、生きた教材で学ばせてくださったことで、命の大切さについて感じ取ることができた。



4年生では、三村用水を作った人々について、教えていただいた。「いつも登下校で通っている道にあるなんて知らなかった。」「三野町にはそんなすごい人たちがいたんだ。」と地域を知り、先人の素晴らしさに気付くことができた。教えていただいたことを劇にまとめて学習発表会で発表し、学びを全校に広げることができた。



6年生では、地層について教えていただいた。

1日を通して、三野町を中心に三好市の地質的な特徴について、実物を見ながら専門的に学ぶことができた。質問にも、すぐにわかりやすく説明して下さり、やりとりを通して、資料に載っていない生きた知識を得たことで、興味関心が高まり、主体的な学習へとつながった。



専門的な生きた知識を得たことで、子どもたちは教えてくださったゲストティーチャーの方々を尊敬すると同時に、自分を見つめることができ、自分が学びたいことへの意欲につながった。

### ⑥三好市学校支援ボランティアのみなさん

様々な学校活動において三好市学校支援ボランティアのみなさんにご協力をいただいている。

3年生の理科の学習では、花や野菜の栽培を手伝っていただいた。子どもたちとともに上手く育つか楽しみにしながら取り組んでくださった。

野菜に実がなりだした頃には、ボランティアのみなさんに何かお礼をしようと、餃子の皮と育てた野菜を使って、一緒にピザを作ることにした。ボランティアのみなさんにも手伝っていただき、自分たちの育てた野菜を一緒においしくいただいた。ともに収穫を喜び合う笑顔でつながることができた。



5年生の家庭科の学習ではミシン縫いのご指導をいただいた。初めてミシンに触れる児童もいたが、丁寧に教えてくださるボランティアのみなさんの優しいお人柄やミシン縫いの腕前にリスペクトしながら、安心して学習をすることができた。

その他、ごみゼロ運動やピカピカタイムなど、いろいろな活動と一緒に取り組んでいただいた。たくさんコミュニケーションをとりながら、楽しく活動することができ、ボランティアのみなさんの笑顔と子どもたちの笑顔がたくさんつながり合うことができた。



## (2) 他校の友だちとのつながり

### ①三野認定こども園

毎年、1年生が、新しく入学してくる年長さんを小学校に招待し、体験入学を実施している。本年度は、5年生が学級活動の時間を使って計画した「夏祭り」に、三野認定こども園の子どもたちを招待した。

準備をしていく中で、わかりやすいルールになるよう何度も考え直したり、喜んでもらえるよう景品や店構えを工夫したりして、自分たちより小さい年齢の子たちが、どうすれば楽しむことができるか、相手のことを考えて行動する姿がたくさん見られた。

活動後の感想には、「こども園の子たちが楽しんでくれてよかった。」と書かれており、人を喜ばせることが自分の喜びにもつながることに気付くことができた。

こども園からは「来年小学校へ行くのが楽しみになった。」との声をいただいた。5年生は、来年、入学してくる子どもたちをお世話する6年生になる。

1年生や学校のみみんなのために行動している姿が見られることを期待している。



### ②王地小学校

本校では、毎年隣の王地小学校と合同で5年生の宿泊活動、6年生の修学旅行を実施している。5年生の宿泊活動では、初めて王地小学校の友だちと合同班を組んで過ごす経験をした。事前にリモートで顔合わせや話し合いを行ったことで、「知らない子」から「一緒に頑張る仲間」へと関係が変化し、「一緒にやってみよう。」「次はもっと話したい。」といった前向きな気持ちを持つことができた。自然の家での様々な活動を通して、「初めて会った友だちと力を合わせて事を成し遂げる。」という成功体験を得ることができた。



6年生の修学旅行でも、バスの座席配置から見学、食事など、すべてを合同班で協力して進めるよう計画した。時間が経つにつれて、楽しそうな笑顔ややりとりが増え、互いを認め合う姿が多く見られた。ふり返りでは、「中学校が楽しみになった。」「また会えると思うとうれしい。」という声が数多く上がった。

このように2年間の継続した合同学習で、5年生で「出会いのきっかけ」をつくり、6年生で「再会からつながりを深める」ことができた。

また、昨年度の1年生も王地小学校の友だちと交流学習を行った。4人という少人数で、同学年の友だちが少ないということもあり、初めは消極的だった子どもも、一緒に活動するうちに、自分から話しかけてコミュニケーションをとる姿が見られた。

王地小学校の友だちは、三野中学校で同じ学級になる仲間たちであり、このような経験は「三野中学校での人間関係づくりの土台」になると考えられる。

今後も、いろいろな学年で王地小学校の友だちと交流学習ができればと考えている。



### ③池田支援学校

本校は、池田支援学校の友だちと居住地校交流を行っている。この友だちは三野認定こども園で一緒に生活していた友だちである。

友だちの視線に合うようにかがんで話したり、一緒にボールを持って投げたりして、表情から友だちの気持ちを感じ取りながら、ともに過ごした。運動場から校舎に入るときに、自分から雑巾を持ってきて車椅子の車輪をふく子どもの姿から、ともに生活することで育つ思いやりを感じた。



1年に2回程度の交流で、限られた時間の中ではあるが、お互いを思い合い、理解し合う大切な時間となっている。今後は集会活動で全校で一緒に交流したいと考えている。

## (3) 自校の友だちとのつながり

### ①やるキッズ班（異学年集団）

本校では、月一回の清掃活動「ぴかぴかタイム」や集団遊び「やるキッズタイム」をはじめ、集会やごみゼロ運動などの活動を「やるキッズ班」という異学年集団で取り組んでいる。学年の違う子ども同士がお互いに声を掛け合ったり、教え合ったりしながら、一緒に活動したりする中で、助け合いの心や責任感が育っている。



## ②なかよくなるうDAY

本校では、人権・ボランティア委員会が中心となって2ヶ月に1回の全校遊び「なかよくなるうDAY」を行っている。委員会の時間に、おにごっこやかくれんぼなど、1年生から6年生までが一緒に楽しめる遊びやルールを考えて、全校に呼びかけて遊んでいる。今まであまり関わったことのなかった友だちと一緒に遊んだり、下の学年の友だちに優しく声をかけたりする姿が見られる。遊びを通して、互いに思いやる気持ちが育っている。



## ③人権集会

人権集会では、各学年ごとに人権について学んだことを話し合っまとめ、発表している。みんながどんなことを学んだのかを知り、お互いに理解し合うことができた。また、人権に関する問題をやるキッズ班で一緒に考えたり、みんなで手話歌を歌ったりして、全校で人権について考えた。全校で一緒に人権について考える時間を持つことが、自他を認め合う心の育成につながると思われる。毎年、子どもたちの実態に応じて人権集会を実施していきたい。



## ④校内掲示～えがおの木 人権標語 みのるん～

友だちを尊重し合い、思いやる心を育てられるよう、子どもたちが生活する教育環境を整え、校舎内の掲示に取り組んでいる。

1学期には、「みんなが笑顔になるためにがんばりたいこと」をえがおの木の、2学期には「人権標語」を廊下に、3学期には「楽しい芝生小学校にするためにがんばりたいこと」をみのるんに、一人一人が考えたことを紙に書き、掲示している。また、昼の放送時に、みんなの誓いや人権標語の紹介もしている。学期ごとに自分を見つめ直したり、みんなでそれぞれの目標を共有したりすることができている。毎日これらを目にすることで、優しい気持ちが育っていってくれることを願っている。



### ⑤芝生っ子きらきらプロジェクト

本校では、継続して、PBSに取り組んでいる。教員主体で始まったが、今は委員会を中心に子どもたちが主体となって取り組んでいる。

朝会の中で各委員会が月交代で望ましい行動を紹介したり、役割演技で望ましい行動のポイントを伝えたりしている。また、よい行動を写真に撮って掲示したり、シールで賞賛しあったりしている。一人一人の素晴らしさをつなげて、みんなできらきらかがやく芝生小学校にしようがんばっている。



## 5 研究の成果と課題

### (1) 成果

#### ①地域の方々・ゲストティーチャーとのつながり

専門性の高い授業や実物を使った観察・活動を行ってくださったことで、子どもたちが意欲・関心を持って主体的に学ぶことができた。また、地域には素晴らしい人がたくさんいらっしゃるということに気付き、尊敬すると同時に、自分の得意なことや自分が頑張りたいことって何だろうと自分を見つめることにもつながった。また、「子どもたちと関わって嬉しかった。」「活動後の様子も気になっていた。」という声もいただき、地域のみなさんの学校教育への関心の高まりも感じた。お互いに学び合っていることが実感でき、地域の方々のウェルビーイングにもつながったと思われる。

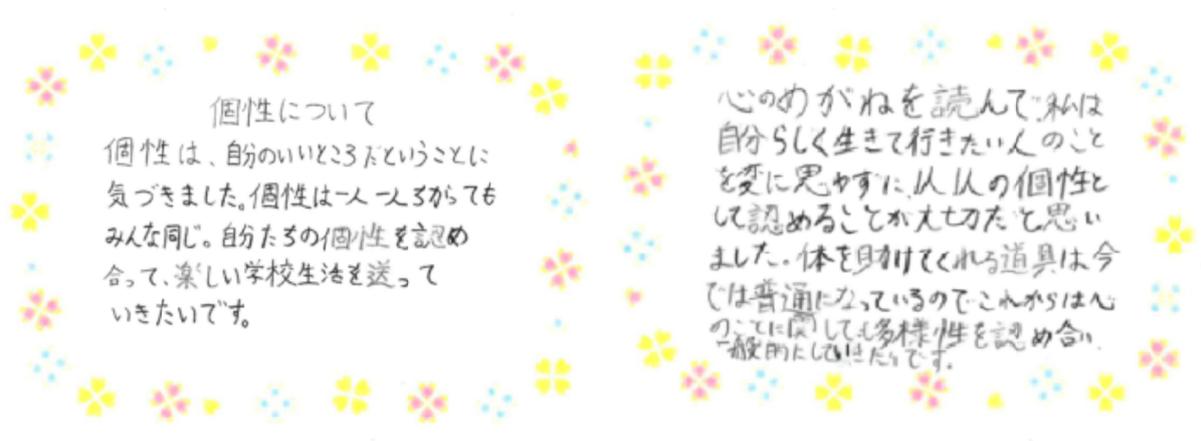
#### ②他校の友だちとのつながり

年齢や学校は違うけれど、相手を思いやり、相手のために自分ができることは何かを考えて行動することができた。また、互いに理解し合い、協力することの素晴らしさに気付くことや、自分の気持ちを様々な方法で表現しコミュニケーションをとることができた。

#### ③自校の友だちとのつながり

「個性いろいろ」「わたしは自分らしく生きていきたい」「多様性を認め合い、一般的にしていきたい」という感想があった。このように自分のよさに気付くことができる子どもが増えてきた。また、一人一人の個性を認め合うことができる子どもも増えてきた。

みんなと違うことで不安になっている友だちに、「個性だから大丈夫」とことばをかけるなど、子どもたちの生活の中に、「個性」ということばが自然と出てくるようになっており、互いを認め合う心が育ってきていると実感することができた。



## (2) 課題

### ①継続する・・・目的の明確化・次につながる振り返り・工夫改善

継続的な取り組みが、子どもたちの心を成長させることがわかった。しかし、地域の方々の高齢化や児童数・教員数の減少により、数年先まで継続していけるかどうか不透明である。子どもたちに何を学ばせたいか、教職員自身が目的を明確にし、次に生かせるような振り返りを行い、子どもたちや地域の実態に応じて工夫改善をしながら、継続できるように取り組んでいきたい。

### ②広げる・・・学校教育に関わる全ての人のウェルビーイング

一部の活動や取り組みはその学年だけにとどまっているものも多い。単学年から複数学年、全学年へと広げることができる取り組みはどんどん広げていきたいと考えている。

また、様々な取り組みや子どもたちの様子を学校だよりやHP等で保護者に知らせしているが、実際に保護者と関わる活動が少なかったと考える。今後は、保護者と共に学び、さらにつながりを広げていけるように計画していきたい。そして、子どもたち、教職員、保護者、地域のみなさんと、学校教育に関わる全ての人のウェルビーイングにもつなげていきたい。

## 5 おわりに

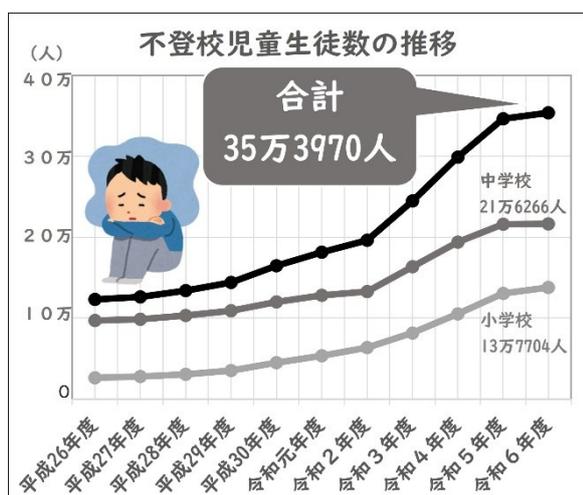
実践を通して、子どもたちの周りには、このような取り組みができる素晴らしい環境があること、ともに学び合えるたくさんの人々がいることに改めて気付くことができた。子どもたちは、実際に顔を合わせてたくさんの人とかかわり、つながり合うことができた。様々なことを学び、一人一人のよさを認めたり、互いに気持ちを伝え合ったりすることができるようになってきた。子どもたちに豊かな心が育ってきていると実感する。

これからも自他共に認め合い、つながり合って、いきいきと生きていく子どもを育てていけるよう、子どもたちと一番関わり合うのは私たち教職員だということを自覚し、一人一人の思いに寄り添い、毎日のつながりを大切にしながら、努力していきたい。

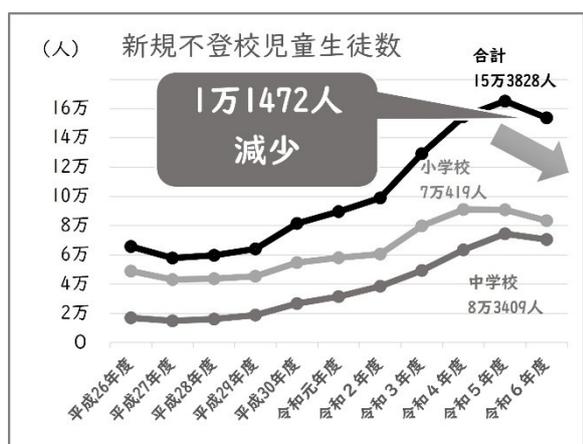
別室登校の生徒の居場所づくり  
～アートセラピー的取組とそよかぜ学級の実際～

三好教育研究所 井川 早苗

1 はじめに



令和6年度の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、学校を30日以上欠席して「不登校」とされた小中学生は、35万3,970人（前年度34万6,482人）となり、過去最多を12年連続で更新した。内訳は小学校が13万7,704人（前年度13万370人）、中学校が21万6,266人（前年度21万6,112人）となっている。一方、増加率は小学校5.6%（前年度24.0%）、中学校0.1%（前年度11.4%）、小中学校全体で2.2%（前年度15.9%）と前年度と比べて大幅に下回り、新たに不登校となった小中学生も15万3,828人



（前年度16万5,300人）で、9年ぶりに減少した。これは、文科省が令和5年に策定した、「誰一人取り残されない学びの保証に向けた不登校対策（COCOLOプラン）」が成果を出しつつある可能性を示唆している。しかしながら、不登校児童生徒の総数は依然として高止まりしており、すべての子どもたちが安心して学べる環境を整備するため、今後も支援の在り方を継続的に検討していく必要がある。

2 研究の目的

私の所属校では、学校に登校できても教室に入れない生徒のために、居場所（別室）を設けている。その生徒たちの余暇の過ごし方を見ていると、自由に絵を描いている生徒が多いことに気づいた。アンケートを実施したところ、「時間があるときにすること」として、絵を描くことが最も多く、生徒全員が絵を描くことを好きだと答えた。また、「どのような絵を描くことが好きか」という問いに対しては、好きなイラストの模写やオリジナルのイラスト制作を好むという回答が得られた。私が美術科の教員であることから、美術科における制作活動によって、生徒たちの心のケアができないかと考えた。

一般的に、幼い頃は好きだった「絵を描く」行為が、成長するにつれて「苦手」と答える人が増える傾向がある。特に中学生の年代には、写實的に描くことへの憧れが強く、「本物そっくりに描けなければならない」という思いから、「絵は苦手」「色塗りができない」「絵心が

ない」などと自信のなさから表現を敬遠するケースが多く見られる。そこで、美術の技法を用いて、抽象的な表現で自分の内面を表現すれば、作品の巧拙に左右されることなく、自信を持って制作でき、その結果として自己肯定感や他者理解につなげることができるのではないかと考えた。

このような考えは絵画療法と呼ばれ、様々な創造の分野にかかわる芸術療法（アートセラピー）の中にあって主要な位置を占め、精神医療の諸場面で実施されている。自己表現や「芸術的」創造性は防護機制を緩めさせ、自由な表現を可能にする。それらの活動は、気晴らしや発散、レクリエーションとしての役割から始まり、抑圧されていた情動の解放による「気持ちの浄化」が期待される。芸術療法士・医学博士の溝上義則氏の調査によると、絵画療法後は抑うつ気分、緊張感、不安感の3項目で有意な改善が見られたようだ。（図）また、絵画制作における行き詰まりの打開や失敗の克服、完成した時の達成感、制作者の成功体験となり、人生の上でも有益なものとなる。本実践においては、制作した作品から作者の精神状態を分析したり解釈したりするのではなく、美術科的な取組として制作を楽しむことに重点を置き実践した。

絵画療法による精神症状の改善					
精神症状					
	抑うつ気分	緊張感	焦燥感	不安感	疲労感
絵画療法前	28.7±28.0	29.1±29.0	22.5±24.1	33.0±29.0	33.1±27.2
絵画療法後	24.2±27.0	24.1±26.1	21.0±23.4	28.5±27.7	32.6±27.3
P値	<0.0001	<0.0001	N.S	<0.0001	N.S

出典元：『アートセラピーBasic 精神科作業療法・デイケアで使いたい12のメソッド』、溝上義則，2019，P15

### 3 これまでの実践

昨年度は①こすりだし（フロッタージュ）、②スタンプング（スポンジを使って）、③ドリッピング・スパッタリング、④ビー玉アートなどを別室登校の生徒たちと取り組んだ。これらの活動を通じて、交流のなかった生徒間に会話が生まれ、楽しい雰囲気の中制作ができた。しかし、「製作はしたいが、集団での活動にしんどさを感じる」と申し出る生徒もおり、生徒たちが安心して過ごせる場所を壊してはいけないということを最優先に考え、個々の生徒の状況に応じて対応することを心がけた。活動を共にするうちに、生徒が不安な心情を話してくれるようになり、その結果、少しずつ授業や行事に参加できるようになった生徒もいた。（実践①）



～④『令和6年度 研究紀要第65集 徳島県三好教育研究所』参照) 以下は昨年度後半から今年度にかけての取り組みである。

#### 4 実践 (令和6年7月より)

##### ⑤シャボンアート

画用紙、シャボン玉溶液、絵の具、パレット、紙コップ、ネット、輪ゴム

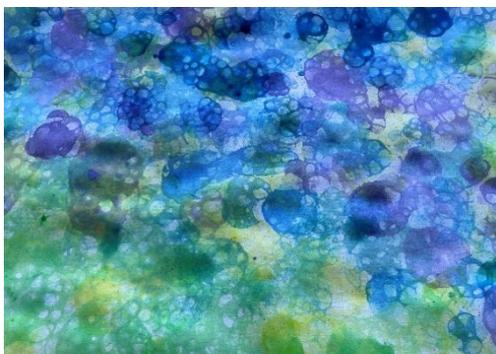


幼い頃の楽しい思い出として、シャボン玉で遊んだ経験は誰にでもあるだろう。その記憶を思い出しながら、シャボン玉を画用紙に吹き付け、その形を写し取って作品にする「シャボンアート」に挑戦した。たくさんの泡を使えば、より面白い造形が作り出せるのではないかと考えた。ストローを束にした

り、ペットボトルの上部をカットしてネットをつけたりなど、様々な道具の作り方が考えられるが、今回はミニサイズの紙コップに輪ゴムでネットを取り付けた簡単な道具を考案した。シャボン玉溶液に好きな色を混ぜて色水を作り、紙コップを浸して勢いよく息を吹き込むと、一気にブドウの房のようなシャボン玉の塊が出来上がった。静かな美術室



の中に「うわっ」と驚きの声上がり、「なんか、すごい」と、思わず笑みがこぼれる生徒もいた。生徒たちは、泡をしばらく見つめると、ぶくぶくと泡を作ることに熱中し始めた。パレットの上にできた泡の塊をそっと画用紙にのせてみたり、直接画用紙に泡を吹きつけてみたり、別の色を作ってみたりと、試行錯誤が自然と行われる様子が見られた。完成した作品は、海の中のような神秘的な雰囲気のあるものとなった。



##### ⑥ティッシュ曼荼羅 (点描)

ティッシュ、水性ペン、新聞

曼荼羅はサンスクリット語で「円」を意味し、古代インドにおいて宗教的な儀式に使用されたものである。曼荼羅のシンメトリーな美しさは、心を安らげる効果があるとも言われている。ここでは、ティッシュペーパーと水性ペンで簡単にできる曼荼羅アートに挑戦した。制作方法は、まず二枚重ねのティッシュペーパーを一枚にし、中心を意識しながら二つ折り、四つ折り、八つ折りとし、三角形の状態にする。次に、ティッシュペーパーの中心を手前に置いて、心の赴くままに、点を打つようにゆっくりと模様を描いていく。これは、点描の技法であり、点の密度や大きさ、配置の変化、配色によって作品の雰囲気が変わってくる。描き終わると、破らないように優しく慎重に広げて完成となる。この技法は巧拙が出にくく、一部分を描くだけで幾何学的な曼荼羅文様が出来上がるため、短時間で仕上げることができる。



折り方を間違えて円形にならなかった生徒もいたが、気軽にやり直しがきくので「あ、間違えた」とすぐに次の制作に移ることができていた。描き終わって広げる瞬間が一番わくわくする瞬間である。そっと広げて初めて出会う予想外の文様に「きれい」「すごいな」などと生徒同士が言葉を交わす場面が見られた。



作品は非常に薄く破れやすいため、ラミネートして保存することにした。日頃使い慣れたティッシュペーパーは安心感を与え、破らないように注意して扱うことで、創作活動に自然と集中することができた。

#### ⑦レザークラフト

レザークラフト用しおり、刻印棒、スーベルカッター、木槌、ゴム板、水、スポンジ、新聞紙クラフト用染料、筆、パレット、ビニール手袋、カッター



これまでの活動を通し、2年生の生徒二人は、美術的な活動に意欲があり、発想も豊かで、表現意図を持って製作を楽しんでいる。「次はどんなことをしたい」という私の質問に対し、「他の2年生はどんなことをしているのですか」と答えてくれた。他の生徒たちの活動に興味があるようだったため、今回は他の生徒たちと同じ「レザークラフト～しおりづくり～」に挑戦することにした。下絵を考える段階

では、タブレットを使用して資料収集を行った。二人とも役30分で「スズランの花」と「お城と月」という主題を見つけ、下絵を完成させた。次の時間には、革の特性や道具の使い方を理解し、スポンジでしおりを湿らせながら、スーベルカッターや刻印棒を使って文様を刻むことができた。お互いの作品を見て「すごく可愛い、スズランが好きなの」や「推しの影響で日本のお城に興味が出たんだ」などと、お互いの興味関心について楽しそうに話す様子が見られた。



休憩時間には、美術室の後方に並べられた他の生徒作品を眺めながら、「この絵きれい、上手いな」「わあ、これ見て、面白い」などと熱心に鑑賞していた。

短時間で他の生徒たちと同じ作品を完成させたことは、二人の生徒の自信につながったと実感している。

## ⑧折り紙～基本形をつなげて作るクリスマスリース～

折り紙、のり、両面テープ、木工用ボンド、リボン、大きめのビーズ、指示書（作り方）



クリスマスが近づき、別室登校の生徒たちにもクリスマスの雰囲気味わってほしいと考え、折り紙のリースづくりを企画した。様々な折り方がある中で、みんなで話し合い、基本の形を組み合わせて作る、立体感と装飾性の高いものを選んだ。少し高度な折り方だが、挑戦することにした。折り紙の得意な生徒は、手順書には載っていない「しっかりと折り目がつく方法」を自分から考案し、一緒に制作している友達に教えることができていた。また、受検

勉強に熱心に取り組んでいる3年生の中からも、気晴らしにリース作りに参加したいと申し出る生徒が出てきて、賑やかな雰囲気で作りが進んでいった。ビーズをボンドで貼り付けてリボンをつけると、豪華なリースに仕上がった。制作途中でそよかぜ学級を利用するようになった生徒がいたため、仕上げ作業をそよかぜ学級で行った。仕上がった作品をそよかぜ学級の先生に見せ、自分の部屋に飾るのだと嬉しそうに話していた。

今回はクリスマスが近かったため、クリスマスカラーの赤と緑で制作したが、後日、このリ



ースを参考に別室登校の1、2年生が、3年生の卒業式で渡すプレゼントとして別の色でリースを作ったそうだ。活動前は別室で一緒に過ごしていても会話がなかった生徒たちだったが、今回のような制作活動を通して、コミュニケーションをとる機会ができ、休み時間にも談笑する姿が見られるようになった。

卒業式の日別れを惜しむ相手が増えたことは、生徒たちにとって貴重な思い出となり、卒業後も学校に会いに来るなど、在校生との交流が続いている。



## ⑨コラージュ～ZINE（ジン）の制作～

ケント紙、色鉛筆、折り紙、マスキングテープ、写真資料、はさみ、のり

このアートセラピー的取組に、最初から継続して参加している生徒が、「自分のイラストで何か作品を作りたいが、たくさんイラストを描くのは難しい」と訴えてきた。そこで、自身が描いたイラストだけでなく、他の素材も使ってコラージュ（貼り絵）による作品制作を行うことにした。コラージュは、1900年代初頭にピカソらがキャンバスに新聞や布など、絵の具以外のものを貼り付けるなどして始めた技法である。一枚の絵にするのではなく、卒業の記念にもなるように一冊の本にすることを提案し、話し合った。その際、少部数の自主出版物であるZINE（ジン）が若者の間で注目されているというニュースを思い出した。ZINEとは、好きなも



のや考えたことを一つの冊子にまとめたもので、自由な発想で誰もが簡単に製作できる。好きなものを貼ったり、描いたりして、どこまでも自由に作れる冊子である。プリンターで印刷して複数冊制作する場合もあるが、今回は装丁のデザインも含め、一冊だけの手作りで、自分だけの「推し」を集めたZINE作りに挑戦することにした。

A4のケント紙を三枚重ねて半分に折り、中央をたこ糸で縫って固定した。表紙は折り紙とマスキングテープ

でコラージュした。ZINEの内容は、童話の世界を見開きページに3つ構成することにした。具体的には、「赤ずきん」「白雪姫」「美女と野獣」の3つに絞り、イメージをまとめていった。まず、自分でイラストを描き、色鉛筆で着色した。なかなか思うように描けず苦労していたが、タブレットで参考資料が見つかるのと、一気に仕上げることができた。次に、イメージに合った画像を探し、その中から気に入ったものを選んでプリントアウトし、配置を考えて貼り付けていった。「白雪姫の映画をお母さんと見に行きました」「このオオカミイケメンだね」などと、ZINEの制作に関連する話で盛り上がった。

画面全部を自作の作品で埋め尽くすとすると、ゴールが遠くなりプレッシャーとなるが、きれいな模様の色紙や印刷した資料を組み合わせ、画面を埋められるため、画力に自信がない人や遅筆な人でも満足のいく作品に仕上がる。図柄をハサミで切り取りながら、進路に関する今の気持ちや、今年は部活動に参加して作品を仕上げたいという思いを話してくれたが、体調



面が心配で継続的に参加できるかど

うかが不安なようだった。このような悩みを話しながら制作を続け、コラージュが完成した段階で友達や先生に見てもらった。

その時に「物語の文章をいれたらどうか」といアドバイスをもらったため、仕上げとして、物語の文章中から気に入った部分を抜き出し、作品に入れることにした。これにより各ページの場面がより分かりやすくなった。



⑩バチック～人権ポスター～

クレヨン（油性）、水彩絵の具、パレット、筆、画用紙

これまで制作を続けてきた生徒は、3年間美術部に所属していたが、完成させることができた作品がないことが心残りな寂しいようだった。送迎の問題や体調面から、部活動に参加できる時間が限られているが、最後の作品を納得いくように仕上げたいという強い思いを受けて、その希望を叶えるため、部活動においてもできる限り支援することにした。今回の人権ポスター制作では、背景の花にバチックの技法を使用することにした。バチックとは、はじき絵とも



呼ばれる技法で、クレヨンなどの油性物質で描いた模様を、水彩絵の具を塗ることで、油が水をはじいて模様が浮き出る様子を楽しむ技法である。偶然にできる色合いや線の模様が美しい。背景に様々な種類の花を個性に見立てて描いていたので、その輪郭をクレヨンでなぞり、薄めの絵の具で明るい雰囲気になるように着色した。明るくはなったものの、単調になってしまった背景にアクセントを加えたいと、生徒が友達と相談していたので、色みや大きさを変える

ことで変化をつけられることをアドバイスした。すると、生徒はバチックの技法が目立つようにしたいと、中央に大きくどっしりとした花を描き、それにより印象的で華やかな効果を生み出した。「この花、いい感じになったね」と声をかけると、「目立たせたかったのですが上手いきました」と答えてくれた。

美術部最後の作品を完成することができ、満足して引退することができたようであった。この作品は「徳島県令和7年度人権に関する児童生徒の作品」に出品され、教育長賞に選出された。

美術の作品制作には「正解」「不正解」がないため、結果を恐れず挑戦することができる。途中で上手いかなと感じても、それをいかして別の表現に変えることができるのである。このような小さな成功体験の積み重ねが、学校全体への抵抗感を薄めさせ、他の活動への意欲へと繋がる可能性もある。



#### ①作業学習～折り紙で作るポチ袋～

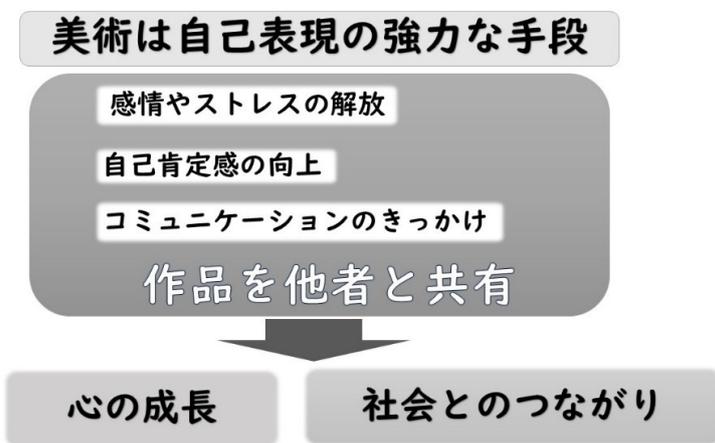


進路選択の時期が近づき、生徒たちは受検勉強に力を入れるようになっていった。一人の生徒は、最初は近隣の高校への進学も検討していたが、支援学校への進学を決めたため、学習以外にも手先の訓練となる作業学習をさせたいと考えた。そこで、正確に同一のものを製作する作業として、身近な折り紙を使ってポチ袋を作ることにした。

手順書を見ながら注意点を伝えると、すぐに折れるようになり、20分で15個制作することができた。できた作品は折り方が丁寧で形の歪みずれもなく正確であった。支援学校では就労が大きな目標であり、作業学習が重要となることを話すと「手先を使う細かい作業は好きです」と意欲を語ってくれた。同一のものを大量に作るという反復作業は、精神面において多くの安定効果を生み出す。同じ手順を繰り返すことで、次に何をすべきかが明確になり、不安を感じにくい。また、意識を作業に集中させるため、雑念を払い、集中力を高めることができる。そして、作業によって完成した作品がその時間の努力

の成果として可視化され、達成感を味わえる。この生徒は作業学習に意欲を示しているため、今後は支援学校での活動を通して、楽しみながら就労に必要な作業能力やコミュニケーション力を習得できることを期待する。

## 5 研究の成果と考察



不登校や別室登校の生徒にとって、美術は自己表現の強力な手段であり、作品の共有は、心の成長と社会とのつながりを育む上で大きな意義を持つと考える。これらの生徒たちは学校という主要な社会的環境から離れているため、自分の感情や考えを表現する機会が限られ、内面に抱え込んだ感情や葛藤が、さらなる孤立を生むことがある。

このような状況において、美術は言語の壁を超えた表現の場を提供できる可能性がある。別室登校の生徒たちは、参加メンバーや人数が日によって異なり、継続的な取組は困難であったが、生徒たちとの制作を通して、以下のような成果が見られた。

### (1) 感情やストレスの解放

アートセラピーは、言語化できない感情やストレスを、美術表現を通じて外に出すことを目的としており、その過程で自身の内面と向き合い、今まで気づかなかった感情や考えに気づくきっかけとなる。また、作品制作に没頭する時間は、心の中の不安から意識を遠ざけ、目の前の作業に集中させるため、心を落ち着かせ、精神的にリフレッシュさせる効果がある。今回の取組では、技法を用いた制作を中心としたため、身体的な動きを伴うストレスを発散や、普段使わない道具の使用による好奇心の刺激も可能であった。

### (2) 自己肯定感の向上

アートセラピーでは、作品の完成度を評価せず、表現すること自体に意義がある。表現が絶対に否定されない安心できる環境下で制作することにより、「失敗」を恐れることなく、自分の考えや感情を解放できる。また、完成した作品は努力の証であり、「自分は何かを生み出すことができる」という達成感につながる。このような、否定されない安心感と完成させる喜びは自己肯定感を高める要因になる。

### (3) コミュニケーションのきっかけ

言葉でのコミュニケーションに抵抗がある生徒も、美術では言葉で伝えにくい複雑な気持ちを、色や形、素材を通して表現することができ、これは非言語的な自己表現といえる。また、作品について説明することや、制作過程で教師や他の生徒と会話することは、言語によるコミュニケーションのハードルを下げ、作品が媒介となって自然な会話を生むきっかけになる。

このように、不登校や別室登校の生徒たちにとって、美術における自己表現の共有は、心の成長と社会とのつながりを育む上で大きな意義を持ち、社会の中で自身の居場所を見つけるための貴重なステップとなる。

## 6 そよかぜ学級の実際（令和6年 2・3学期）

### ①クリスマス会



そよかぜ学級では学期に1回校外学習を予定している。昨年度の研究のまとめでは、1学期に実施された、「パン作り」を紹介した。その続きとして、2学期に実施された「クリスマス会」を紹介する。そよかぜ学級にほとんど毎日出席しており、クリスマス会を楽しみにしていた生徒がいたが、体調不良で欠席となり、参加者は1名のみとなった。そよかぜの先生方や

「楽食みのり」の方たちとボードゲームや、ビンゴゲームをして盛り上がった。美味しい昼食とクリスマスケーキをいただき、参加した生徒からは「ゲームが楽しかったしプレゼントもたくさんもらって嬉しいです。ごはんもすごく美味しかったし、お腹いっぱいになりました」と感想を言ってくれた。



### ②お別れ会

3学期には「お別れ会」が開催された。5名の生徒が参加し、そよかぜ学級の卒業生たちも大勢参加してくれたので、会場は賑わった。ボードゲームで盛り上がった後、中学生の女子たちがファッションやメイクの質問を卒業生にしたり、漫画やゲームの話をしたりするなど、楽しい雰囲気の中で時間が過ぎていった。いつしか、自然と話題は先輩たちのそよかぜ学級で過ごした思い出へと移っていった。楽しいエピソードに爆笑しながらも、その会話の中からそよかぜの先生たちへの感謝の気持ちが強く伝わってきた。

最後に、社会人となった先輩たちから、後輩へメッセージが送られた。「学校にいけないことは悪いことではない」「ここに来ている人は同じ思いや悩みがあるのだということが、あの



時の救いだった」「そよかぜ学級の先生たちは、学校のことを何も聞かず、温かく見守ってくれたのが嬉しかった。信じて見守ってくれたから、そよかぜの先生たちに恥じない生き方がしたいとずっと思ってきた」「みんなも今は不安かもしれないけど、大丈夫だから」と、涙ながらに思いを語ってくれた卒業生の姿に、その場にいた私たちは、心打たれると同時に、勇気づけられた。

## 7 おわりに

そよかぜ学級の他にも、不登校の児童生徒の居場所はある。みんなの居場所「みのりこ」は三野町にあり、年齢、国籍、障がいなどを問わず、誰もが安心して過ごせる居場所である。私の所属する中学校では、ここでの活動に参加した日を「出席扱い」としている。「みのりこ」は、みんなが社会の中で自分らしく生きていけるように一人ひとりが感じたことを安心して表

現し、それぞれの感性を互いが認め合い、みんなが大切にされること、そして、手や体を動かす活動を通して仲間とつながれる場を目指している。不定期でアートワークや木工教室が開催されており、私が参加したアートワークでは3歳から99歳までの人たちが、自由に楽しく絵画制作をしていた。ちょうど所属校の生徒が参加していたので、ペアになって一緒に制作を楽しんだ。



東みよし町の、「カフェ ブルースカイ」は、家庭や学校でもない、リラックスして過ごせる



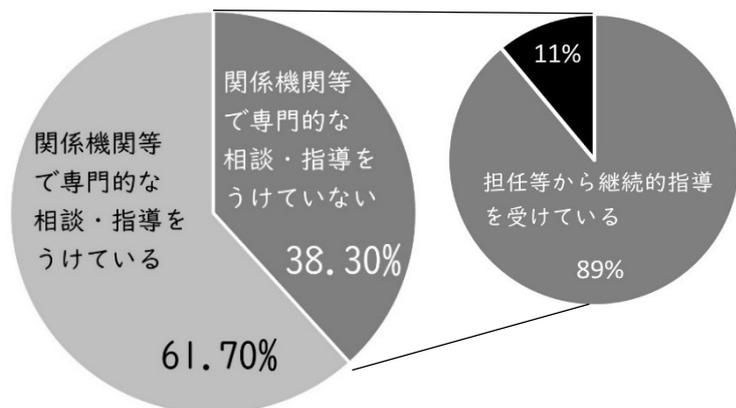
サードプレイスである。様々な悩みを一人で抱え込まないよう、つながりづくりをサポートしている。火曜日と金曜日にオープンしており、ほぼ毎日通っている生徒もいるそうだ。地域の方々の協力で、イベントや講演会が開催されており、令和7年6月から、東みよし町の小中学校ではブルースカイを利用した日は出席と認められることになった。

今年度より、私の所属校に、校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム 以下「SSR」）が設置されること

になった。これにより、専属の校内教育支援センター支援員が配置され、今まで以上に手厚く支援ができるようになった。場所は2階の元PC教室を利用し、「ホットルーム」という名称で運用することになった。校内に安心して過ごせる場所があれば、仲の良い友達と過ごすこともでき、自分のクラスでの授業にもそのときの状況に応じて参加しやすい利点がある。このようなSSRがすべての学校に設置されることが望まれている。



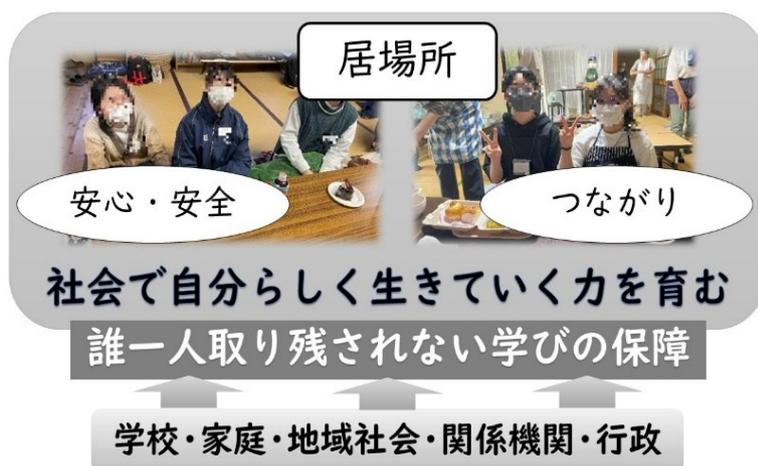
令和6年度の文科省の調査では、学校外の機関などで専門的な相談や指導を受け、指導要録上出席扱いとなった児童生徒数は4万2,978人、自宅でICTを活用した学習活動を行い、出席扱いとなった児童生徒が1万3,261人、欠席期間の学習成果を指導要録に反映した児童生徒は8万1461人と報告され、不登校児童生徒の学校外での活動の努力や成果が評価されつつあることが



示された。しかしながら、学校内外の機関等で専門的な相談・指導等を受けていない児童生徒は13万5,724人であり、全体の38.3%に上る。そのうち、担任等から継続的指導を受けている児童生徒が89%であり、関係機関との連携のないまま、担任等が相談や指導を全て担っているケースも依然として多いことが分かった。

変化の激しいこれからのVUCA時代を生きていく子供たちには、予測困難な時代に向けて、望む未来を自分自身で見出し、作り上げていく力が求められる。一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓くことが、ウェルビーイング（well-being）の向上につながる。このようなVUCA時代に必要とされる力は、不登校という状況を乗り越える中でも不可欠な力であり、また、社会の激しい変化が、学校内外の多様な選択肢の普及を後押ししている。不登校児童生徒たちにとって、VUCA時代がもたらす社会の不確実性は課題を増幅させる側面もあるが、新たな可能性を見出せる側面もあるのではないだろうか。

不登校や別室登校の背景には、家庭環境、学校生活、子どもの特性、友人関係など非常に多様で複雑な要因が絡み合っている。そのため学校が単独で解決することは困難である。不登校解決の目標である、子どもたちの将来的な社会的自立にむけて、各機関がそれぞれの専門性を生かし、情報を共有し役割分担して連携することで、個々の状況に合わせた、きめ細やかな支援が可能になる。安心安全に過ごせて、自分をそのまま受け入れてもらえる居場所づくりは、広がりつつある。しかし、別室登校などの不登校傾向も含めると35万人という不登校児童生徒数は、氷山の一角に過ぎないものであり、公的機関・民間機関を合わせても「学校に代わる居



場所・学びの場」は足りておらず、不登校児童生徒の教育を受ける権利は十分に保証できていない。社会的自立を目標として、多様な学びの選択肢のもとで子どもたちが学ぶためには、様々な機関の立ち上げや、相互の連携が必要になる。まずは、その生徒に寄り添い、つながることからはじめ、子ども達が社会で自分

らしく生きていく力を育むことを目的とし、誰一人取り残されない学びの保障に向けて、学校、家庭、地域社会、関係機関、行政が一体となって取り組むべきものと実感している。

〈参考文献〉

- ・令和6年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果 (文部科学省 令和7年10月29日) ([https://www.mext.go.jp/content/20251029-mxt\\_jidou02-100002753\\_1\\_4..pdf](https://www.mext.go.jp/content/20251029-mxt_jidou02-100002753_1_4..pdf))
- ・令和6年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要 (文部科学省 令和7年10月29日) ([https://www.mext.go.jp/content/20251029-mxt\\_jidou02-100002753\\_2\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20251029-mxt_jidou02-100002753_2_5.pdf))
- ・溝上義則(2019)『アートセラピーBasic—精神科作業療法・デイケアで使いたい12のメソッド—』新興医学出版社
- ・栗本美百合(2018)『学校でできるアート・アズ・セラピー—心をはぐくむ「ものづくり」—』誠信書房

## 研究主題

### よりよい「振り返り活動」を目指した学習活動の工夫 ～小学校家庭科学学習における実践～

三好教育研究所 大倉 尚子

#### 1 はじめに

小学校学習指導要領の総則に「児童が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫すること。」と記載されている。これは、「振り返り活動」が重要な学習活動であることを示している。子どもたちが学習の目標（めあて・課題）と見通しを立てて学習に取り組み、その過程や結果を振り返ることで、次の学習に生かすことができ主体的・探究的な学びのサイクルにつながっていくと考える。

「振り返り活動」により、児童が「何を学んだのか」「どんな力が身に付いたのか」「自分の考えがどう変わったか」を意識的に見つめ直す（メタ認知する）ことは、学習した内容が自分のものとして整理・定着することにつながる。また、自分の変化や成長を自覚することで、達成感や充実感が得られ、学習への意欲が高まり、自ら進んで学ぼうとする主体的な態度を育むことができる。学習活動において「振り返り活動」を行うことは、主体的・対話的で深い学びを実現するための重要な要素であり、児童が知識・技能を確実に身に付け、それを生活に生かす実践的な態度を一層育むことができると考える。

#### 2 研究の目的

「振り返り活動」についての児童の実態を把握するため、西井川小学校5・6年生（11名）にアンケートを実施した。（2025年6月2日）

アンケート結果から、9割の児童が「振り返りをする」と勉強したことや活動内容がわかる」と答えている。（図1）児童にとって「振り返り活動」はその時間に学習した内容の確認や考えの整理に役立っていることがうかがえる。

振り返る内容については、できたことやわかったこと、がんばったことを多くの児童が挙げている。しかし、次の授業につながる疑問に思ったことやわからなかったこと、次の授業に活かそうなどについては半数にとどまっている。（図2）また、8割の児童が「振り返り活動」で何を書けばよいか思い浮かばないことがあると

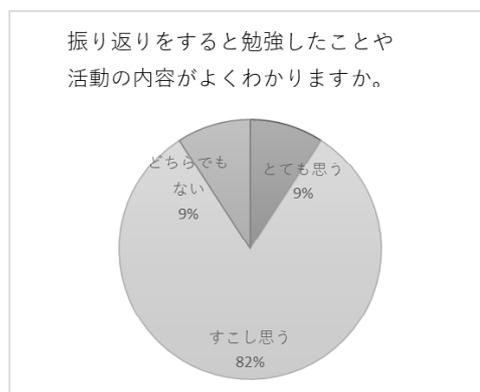


図1

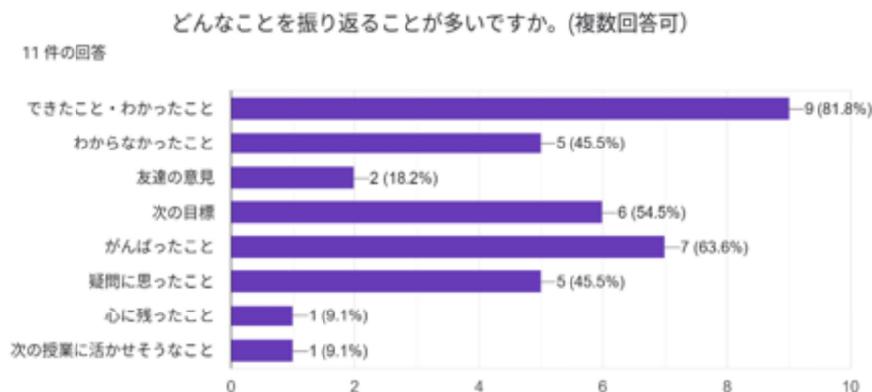


図2

答えている。(図3) さらに、半数以上の児童が書き方が分からず困っている。(図4)

このことから、学んだことが次に生かせると考える児童が少なく、学びがつながりにくくなっていると考えられる。振り返りが苦手な児童は、目的や意味が理解できていないために振り返りが単なる感想で終わってしまうことがあったり、何を書けばよいか分からず適当なことを書いたりしているのではないだろうか。経験したことが学びとして定着するよう、次の学習へつながる意識的な改善行動に至るよう、「振り返り活動」をよりよいものにする必要がある。

そこで、本研究は、家庭科の学習において、「振り返り活動」の質を高める方法を工夫することで、児童の学習内容の定着を図るとともに、学んだことが自分の生活に役立っているということを実感し、生活に生かしていこうとする実践的な力を育てたい。

また、自分の行動や思考を客観的に見つめ、改善することのできる自己調整能力の育成を図るとともに、振り返りの本質的な「よさ」を自覚させたい。

### 3 研究の実際

本研究は、西井川小学校5・6年生(12名)の協力を得て実践した。題材名「クリーン作戦で快適に」、「衣服の手入れで快適に」の各4時間の学習で行った。

#### 学習計画

クリーン作戦で快適に(全4時間) R7.6月実施	衣服の手入れで快適に(全4時間) R7.10月実施
1 なぜそうじをするのか考えよう	1 衣服の手入れについて考えよう
2 そうじの手順を調べよう	2 洗たくの仕方を調べて洗たくの計画を立てよう
3 その場所に合ったそうじをしよう	3 洗たくをしてみよう
4 実践報告会をしよう	4 これからの生活に生かすことを考えよう

#### (1) 学習展開の工夫

「振り返り活動」の質を高めるためには、題材全体を見通した学習を展開し、常に課題を意識して学習することが大切である。

まず、題材の導入となる1時間目に、子どもたちの実生活の中にある問題に気づかせ、これを解決するための課題を設定できるようにした。今の自分の現状を知るために、アンケート調査を行ったり資料を提示して生活を振り返ったりした。今の姿とありたい姿とのギャップから問題に気づかせ、課題を見つけた。この活動を通して、解決しようとする意欲を高めるとともに、目標を明確にもてるようにした。次に、授業の終わりに、その時間のねらいに対してどのような学習ができたかを振り返る時間を毎時間設けた。そして、最後には、学習のまとめとして題材全体を振り返り、学んだことを自分のこれからの生活にどのように生かしていくかを考える場を設定した。

振り返りの時間に書くことや考えることが思い浮かばないことがありますか。

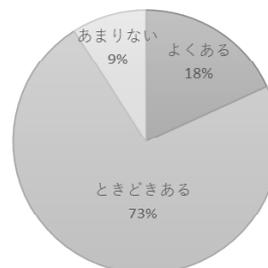


図3

振り返りの書き方が分からなくて困ることがありますか。

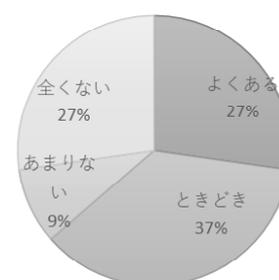


図4

### ①「クリーン作戦で快適に」の学習

学校内の汚れやごみをテープでうつし取り、どこにどんな汚れがあるか調べたり、埃やカビの写真を見たりした。「汚い。」「触りたくない。」「いつもこんな埃とかを吸いよん。大丈夫かなあ。」というつぶやきから「こまめに掃除をしないといけない」という意識が生まれ、「そうじ名人になろう」という課題が立てられた。そして、普段の掃除の時間にあまり掃除ができていない場所をいくつか挙げ、それぞれの場所に合った掃除の仕方をグループに分かれて調べ、実際に掃除をしてその報告会を行った。

### ②「衣服の手入れで快適に」の学習

着替えをしようとしたら衣服が汚れていて困ったという例をもとに、衣服の手入れをしておく必要性を感じられるようにした。普段は家族に任せているという現状から自分でできることを見つげるために「衣服の手入れ名人になろう」という課題を立てた。さらに、洗濯機で洗った靴下を観察し、洗濯機で洗っただけでは落ちない汚れもあることに気づき、手洗いの必要性を実感した。洗濯の仕方を調べ、手洗い実習をしてわかったことを全体で話し合った。

## (2)「振り返り活動」の充実につながるICTの活用の工夫

### ①課題設定の場における活用

日常生活に特に不便や不十分さを感じることなく過ごしている児童にとって、自分の生活をよりよくしようとする意識は低い。そこで、題材の導入で写真や動画を使い、普段見逃している問題点に着目できるようにした。

家の中の汚れを拡大したものや衣服についてシミなどの写真を提示することで、自分の生活を見つめ直す機会を設けた。「なぜこんな汚れがあるのだろうか」という疑問や「自分で手入れできるようにになりたい」という思いや願いを生み出した。写真や動画を使って視覚的に働きかけることで児童の興味関心を引き出し、「このままではよくない。」「どうすればよくなるのだろうか。」「自分たちできれいにしたい。」といった学習する必要感がある課題意識を具体的に共有することにつながった。特に、廊下や教室などの隅や蛇口の付け根などに汚れが溜まりやすいことに気づき、「隅のところに気を付けて掃除をせないかん。」との声が挙がり、「手の届きにくい所をどのように掃除するか」を調べる児童が多くいた。

### ② 比較するための活用

自分で調べた清掃の仕方を実際に試す実習活動において、タブレット端末を使い、清掃前後の様子を写真に撮った。また、活動の様子を動画に撮影して記録に残した。実習活動後、それらを活用して場所別グループごとに「振り返り活動」を行った。ワークシートやプ



掃除をする前



掃除をした後

レゼンテーションのスライドに写真を貼り付け、活動前後の様子を比較できるようにした。また、動画を見て活動を振り返りやすくした。そして、課題を解決した方法をまとめて学級全体で報告会を行った。「クエン酸を使ってこするとカビや白いヌメヌメしたよごれが取れた。」「隅の汚れは歯ブラシで取るときれいになった。」「窓のさんや網戸はスポンジでこすったらスポンジが真っ

黒になった。」「IHコンロの油污れは重曹を使うときれいにできた。」と自分たちがどのような方法で掃除をしたかを説明した。写真や動画で様子を記録していたことで、じっくりとその場所の汚れを見たり、それぞれの場所に適した掃除の仕方の工夫を客観的に見直すことができ、普通のし慣れた掃除では汚れが落とせていなかったことに気づけた。「家でもいかせるようにがんばりたい。」「そうじを大切と思えるようになった。」「そうじのやる気が上がった。」「いがいと楽しいことがわかった。」と児童の気持ちに変化が生まれたことがわかった。題材全体の振り返りでは「場所によって汚れや掃除の仕方がちがうことが分かった。」「掃除についての知識が増えた。」「自分の家で（他のグループの掃除を）やってみたい。」といった意見があり、自分と友達の活動を比べて学んだり実践意欲が高まったりする姿が見られた。



手洗い場の掃除の様子



実践報告会

### (3) 3つの視点での振り返り

振り返りが「楽しかった」「難しかった」といった感想にとどまらず、学習内容や学びの過程に焦点を当てた振り返りになるよう、「Y(やったこと)・W(わかったこと)・T(つぎにすること)」という3つの視点を児童に示した。

これは、徳島県小学校家庭部会で数年前から研究を進めているフレームワークである。やったこと (Y) の明確化を行い、自分の行動や状況を客観的に把握し、わかったこと (W) の抽出によって経験から得られた気づき、成功や失敗の要因といった学びを言語化して経験を知識として定着させる。つぎにやること (T) の設定では「わかったこと」を活かして、次に

何を改善し、どう行動を変えるかという具体的な計画を立てる。具体的なアクションに落とし込むため、単なる反省で終わらず、行動変容と成長につながるようになる。この3つの視点を示したワークシートをCanvaで作成し「振り返り活動」の時に配布、説明した。

単に活動を振り返るだけでなく、具体的な行動につながる質の高い学びを抽出することを目的とし、経験を成長に結びつけるようにした。学んだことや課題解決のために工夫したことを振り返り、次の課題や自分の生活に生かせることを見つけていくようにした。

### ふり返しシート

YWTを意識して学習を振り返ろう

Y やったこと	W わかったこと	T 次にやること
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 努力したこと</li> <li>・ 工夫したこと</li> <li>・ 発見したこと</li> <li>・ よかったこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 気づいたこと</li> <li>・ 考えたこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 継続していく点</li> <li>・ 改善する点</li> </ul>

図5 児童に配布したシート

○児童の振り返りシートより

「クリーン作戦で快適に」

- ・どこにどんなよごれがあるか調べた。色々なところによごれがたまっていた。手洗い場のせいかくなくそうじの仕方をしりたい。
- ・IHコンロのそうじの仕方を調べて、洗ざいを使わなくても、そうじをできることがわかった。つぎに実践してがんばりたい。
- ・そうじをした。まどのレールによごれがたまっていた。家でもそうじをしようと思った。
- ・そうじのほうこく会で場所によってつかう道具をくふうしてすることがわかって、家でもちよつとしようと思った。

「衣服の手入れで快適に」

- ・衣服のことを勉強して、放っておくと汚くなるから、服を洗濯機に入れたり、自分で洗う。
- ・衣服を洗うときの方法が色々あることを知った。手洗いや洗濯機を使った洗い方を試してみたいと思った。手洗いを家庭科でするらしいから頑張りたい。
- ・手で汚れたものを洗ったらあんなにきれいになるけど大変なことがわかった。
- ・この学習を通して、洗濯をすると気分がいいし、きれいになると気持ちよく着れる。洗濯は、これから自分から洗濯したり、物、汚れによって洗い方を変えたい。日光も考えたい。

児童の振り返りからは、特に「今日分かったことを生かして掃除をする」「家でもいかせるようにがんばりたい」「手順とやり方がわかったから家でやりたい」といった家庭での実践を意識した言葉が多く見られるようになった。実践的・体験的な活動を通して身に付けた知識技能が実生活に活用できるという学びのつながりを児童が感じられるようになった。

また、初めは「何を書けばいいん。」と困っていた児童も「今日したことは何だっけ。」「どんなことがわかった。」「次にするときにはどうする。」と声をかけると「ごみ見つけた。汚かった。隅の掃除する。」と答えていた。2回目からは自分で考えてシートに記入できるようになった。

(4) 成長を実感できる振り返りシートの工夫

家庭科の学びを家庭や地域での実践へとつなげるためには、学んだことを蓄積していく必要がある。題材を通して蓄積していくことで、自分の成長に目を向けたり、「生活の営み」に対しての見方の変化、また自分の気持ちの変化に気づいたりする姿も見られるのではないかと考える。

そこで、「1枚ポートフォリオ (0 PP:One Page Portforio)」に記録し、何を学んだかについて毎時間蓄積できるようにした。振り返りシートを1つの題材で1枚とし、

図6 紙の振り返りシート

その中にまとめることで、各授業を細切れに理解するのではなく、それらのつながりを意識し、学びをつなげられると考えた。また、シートの上部には、題材全体を通して考える課題を書いておくことで、児童が常に課題を意識しながら学習を進めるようにした。1つの枠を1時間とし、シートに並べた。その効果として、次のことが挙げられる。学習が点ではなく線

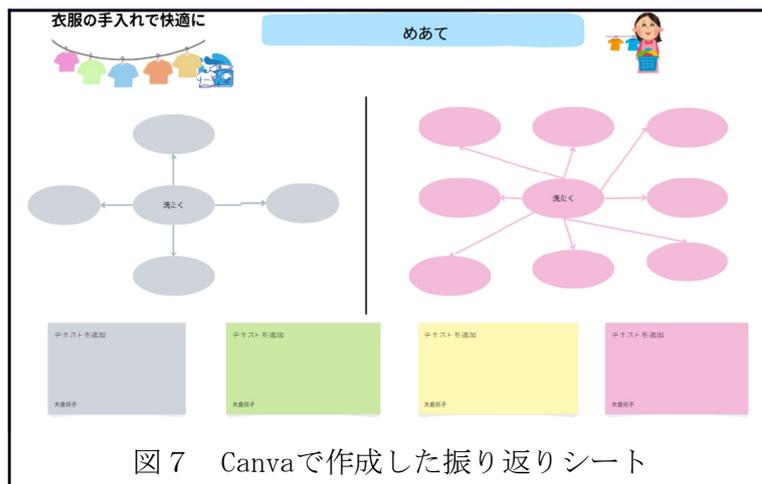


図7 Canvaで作成した振り返りシート

でつながっていることを児童自身が視覚的に確認できるようになること。過去と現在の記録を簡単に見比べられるため題材全体の目標に向かって、それぞれの時間での自己の成長や変容を具体的に自覚しやすくなること。「次の時間にはこんなことをがんばりたい。」という見通しをもてること。1回目は紙、2回目はタブレット端末のワークシートを使った。

①「クリーン作戦で快適に」の学習

図6のワークシートを準備した。2時間目に身の周りの汚れを掃除する方法を調べたことで「そうじをがんばろう」という意欲が高まった。調べたことを試し、「きれいになると心がスッキリした。」という気持ちが生まれた。さらに、友達との意見交流で学びを広げ、家庭実践の意欲が育っていった。(図8)

②「衣服の手入れで快適に」の学習

図7のシートを準備した。児童のタブレット端末にCanvaで作成したシートを配布した。1時間目に立てた「自分で洗たくできるようにになりたい」という課題に向け学習を始めた。2時間目に手洗いをすることのよさを知り「自分できれいに手洗いしたい」という意欲が高まっていった。3時間目には手洗い実習を振り返り、日常生活での実践意欲が向上した。そして4時間目には学習全体の振り返りと学んだことを生かしてこうとする意識を高めた。(図9)

図8「クリーン作戦で快適に」A児の振り返りシート

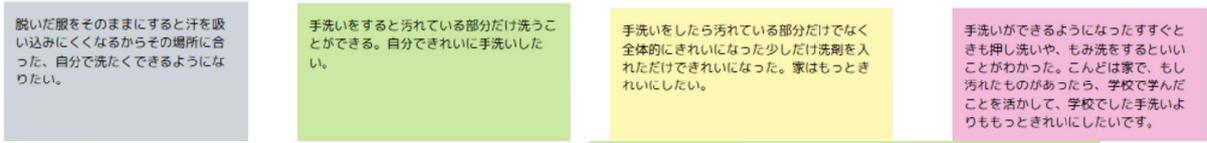


図9 「衣服の手入力で快適に」 B児の振り返りシート

③ ウェビングマップの活用

1枚ポートフォリオの中にウェビングマップの欄を設けた (図6左右の枠、図7上部)。新しく知った言葉や感じたことを簡潔な言葉で書き入れていくようにした。学習前のマップ (左) と、毎時間ごとに新しく学んだ知識や経験したことなどの情報を書き加えていくマップ (右) に分け、学習前の自分より知識・技能が習熟・定着していることを児童自身が俯瞰して実感できるようにした。

「クリーン作戦で快適に」の学習前は掃除についてあまり関心がなく浮かぶ言葉も少なかったが、学習を進めることで、よごれの原因となる「カビ」「ほこり」やそれを取り除く方法「重そう」「クエン酸」「ブラシ」といった科学的な知識や根拠に基づいた言葉が増えた。「続けないといけない」「定期的にする」といった掃除はきれいな状態を保つために続ける必要があるという意識もほとんどの児童から出てきた。(図10)

「衣服の手入力で快適に」の学習でも衣服の汚れ方によって洗濯の仕方を変える必要があることを理解したことが見て取れる。気持ちの面でも学習前は「きたない」「時間がかかる」といったマイナスイメージが目立つが、学習後は「きれい」「いい気持ち」といった肯定的な気持ちも育っていた。(図11)

学習前は掃除も洗濯も「家の人にしてもらおうのが当たり前」という意識で自分の問題として捉えていなかったが、自分たちが調べた方法で実践活動を行ったことで、自分たちの力で生活をよくすることができるという自覚と自信が生まれてきたという変容が見られた。



図10 C児のウェビングマップ

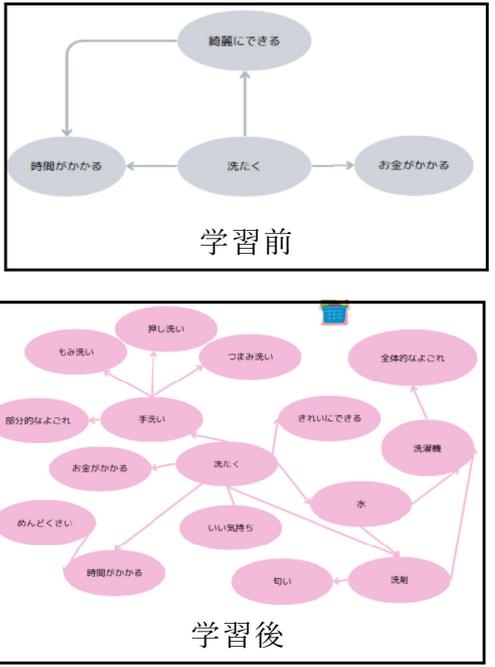


図11 D児のウェビングマップ

(5) 協働的な学習の振り返り活動

①2人1組になったの相互評価の場の設定

「衣服の手入れで快適に」の学習では、相互評価を行った。衣類などを手洗いして汚れを落とすという課題解決に向けた実践活動を2人1組で行い、他者からの意見を踏まえて考えを深めることができるようにした。1人が活動をしている間、ペアの児童は活動の様子をタブレット端末で動画撮影を行った。互いの実習する様子を撮影し保存することで、各自の技能や言動を可視化し、技能の習得状況の把握や自己評価・改善に生かすことができるようにした。また、相互評価のできるワークシートにペアの児童が評価を書きこむようにした。友達の意見から自分では気づかなか



洗濯実習の様子



干し方の工夫

かった視点に気づくことにもなり、学び合えるようにした。活動中にはペアの友達から「水が少ないから増やしてみたら。」「泡が残ってるからもう1回すすいだ方がいいよ。」といったアドバイスや「(洗った後の)水が汚れとる。」「すごい。見て。筆箱の黒かったところが取れて、めっちゃきれいになった。」などと気づいたことを伝え合う姿や「この干し方でいいかなあ。」と相談し合う姿が見られた。手提げ袋や上靴入れなどの少し大きなものや、ぬいぐるみのようなふわふわ

洗たくする前 (よごれを落としたいところに○)



洗たくした後



評価すること	評価	理由
計画通りに実せんできたか。	◎ ○ △	計画どおりに、洗剤と水を入れた
環境のことを考えて洗たくすることができたか。	◎ ○ △	洗剤をたくさん入れずに洗えていた
よごれの落とし方は効果的だったか。	◎ ○ △	筆箱が綺麗に汚れが取れていた

図12 E児の相互評価ワークシート

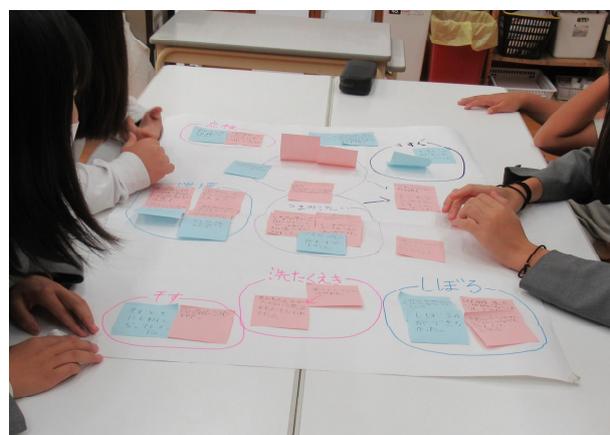
したものは、すすぎの時に手で何度絞っても洗剤の泡が残ってしまったり干した時には水がぼたぼた落ちてきて、手作業だけでは難しいことに気づいたりする児童もいた。干すときには、「窓際の方が日が当たって乾きやすいよ。」「しわをのぼすために洗濯ばさみを2つ使って広げた。」と工夫していた。

### ②グループでのKJ法の活用の工夫

「衣服の手入れで快適に」の学習では、学習全体の振り返り活動でKJ法を行った。まず、個別での振り返り活動を行い、うまくいったことをピンクの付せん、課題を青の付せんにそれぞれが記入した。次に、グループに分かれ、グループの中で意見を出し合い、よく似た考えをグルーピングしていった。全員が付せんに書いた意見を出し合い、アウトプットしたことを視覚的にまとめることでグループ内で情報共有を図った。他者の成功体験や失敗からも学ぶことができ、学級全体の知識やスキル向上につながった。



付せんへの記入



グループでの意見交流

### ③学級全体での交流の工夫

「衣服の手入れで快適に」の学習では、グループで話し合ったことをさらに学級全体で交流し、学びを深めた。まず、学習して気づいたことを洗濯の手順（準備する・洗濯液を作る・洗う・しぼる・すすぐ・しぼる・干す・取り込む・片付け）それぞれの過程ごとに分けた。そして、洗濯をするときのコツと、どうしてそのようにするのかという理由を学級全体で考えた。児童の意見から出たキーワードを教師が板書し整理した。最後に板書を参考にしながら個別で振り返り、自分の生活経験や学んだ知識（事実的な知識）を関連付けてこれからの生活で自分が生かしていきたいことを考えた。

「全体的な汚れは押し洗いだったけどもみ洗いやつまみ洗いをするとシミが落ちた。」というだけでなく、「洗剤と水の量を守らないと水がもったいない。」「日光に当たった方がよく乾いた。」と環境面も考える児童もいた。洗ったものを絞るのに苦労していた児童は、「大きいものはやっぱり洗濯機の方がいい。」と手洗いと洗濯機洗いの特長に気づくことができた。

自分一人で振り返るのではなく、友達との意見交流を行うことで、多様な考えに触れることができ、学びを深めていた。また、板書にまとめ視覚的にしたこと児童の考えをさらに整理することができ、深く考えることができた。



全体での意見交流



個別での振り返り活動

#### 4 考察

2つの題材を学習した後、児童にアンケートを実施した。  
(2025年11月15日)

初めに学習全体を見通して課題を設定し、学習を組み立てていったことで、毎時間のめあてがはっきりとし、学習がスムーズに進んだ。その時間に「何をするか」「何を学ぶか」が教師も児童もはっきりと理解していたため、「何をしたか」「何を学んだか」という振り返りにもつながった。そのため、9割の児童が「振り返りのおかげで前よりもできるようになった」と感じていた。(図13)

個別での振り返りでは、1つの題材を1枚のワークシートに蓄積していくことで、どの時間に何を学んだかが一目で分かり、児童が自分の成長を感じ取ることができた。この情報は、教師にとっても児童に対する理解を深めるとともに、授業改善や評価に生かすことにもつながった。

「振り返り活動をしてよかったと思うのはどんな時か」という質問でも「覚えやすくなったり日常生活ですぐに思い出せることができる」「前失敗したところを直せたり、前との変化に気づける」「生活に生かせた」などといった回答があった。

また、YWTという3つの視点の枠組みを決めたことで、単なる感想ではなく、児童自身が学んだことを実感できるようになった。(図14) その一方で比較的自由的な枠組みであったため、記述の多い児童と少ない児童で振り返りの深さに差が生じたり書き方がわからずに困る児童がいたりして、活動を振り返るための声かけを行った。振り返りの書き方について個別指導を行うことの必要性が課題として残った。

活動中の様子を撮影した動画や写真は、9割の児童が振り返り

振り返りのおかげで前よりもできるようになったと感じることがありますか。

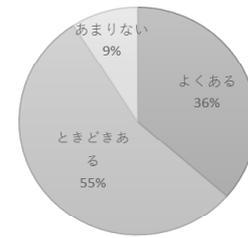


図13

「YWT」の視点で振り返りをしましたが、書きやすかったですか。

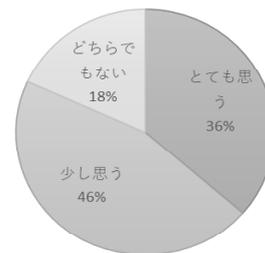


図14

撮影した動画や写真を振り返りの時に見て確認することはできましたか。

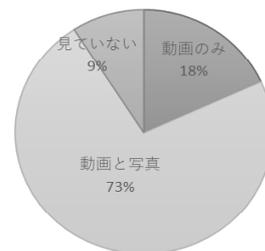


図15

返りの時に活用しており、活動中の記録が「振り返りの時に活動内容の一部を忘れてしまって書けない」という児童の手がかりになっていた。(図15) 学びの成果物を整理保存しておくことが児童の振り返りに生かされることにつながった。

個別の振り返りからグループで話し合う協働的な活動を取り入れたことで、児童の考えを整理することができた。(図16) うまくいったことに関してみんなで共有することができ、家庭実践への意欲を高めることにつながった。次の時間やこれからの生活といった先を見通して「何をがんばればいいのか」を8割の児童が考えていた。(図17)

しかし、個の振り返りから全体の共有へ、そして個人へという流れでは、活動に時間がかかり、本来の学習時間に影響を及ぼす授業もあった。活動時間の最適化が必要である。

今回の実践で効果的だった振り返りシートを今後も改善し、より深く確かな学びにつなげるとともに、これからの実生活に生かせる実践力を養っていきたい。

## 5 おわりに

今回の研究で「振り返り活動」を充実したことで、児童が確実に知識・技能を定着し、生活での実践意欲を高めることができた。学習後の家庭実践では、学校で学んだことを生かして取り組めており、学びのつながりを児童自身が感じることができていた。それが学習中の児童の姿や振り返りの言葉として表れている。

振り返りの習慣は、学校現場だけでなく企業でも注目されている。小学校の学習活動から繰り返し行うことが、自己を客観的に見つめ、そこから得た気づきを次に生かして成長する力を育てると考える。生涯にわたりよりよく学び続けるための力をこれからも育てていきたい。

今、学校へ登校しにくい児童生徒を受け入れている三好市教育支援センター「そよかぜ学級」の児童生徒に対しても「振り返り活動」ができないか模索している。社会性・活動性・対人的な能力の維持と向上を目指す中で、生活に役立つスキルを身に付けるための活動を定期的に行っている。手始めに、手縫いによる基礎的な技能の習熟を図るためのマスコット制作を現在進行中である。こちらの研究も今後深めていきたい。

## 参考文献

- ・ 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 家庭編 文部科学省
- ・ 田村学（2018）『深い学び』東洋館出版社
- ・ 筒井京子（2022）『小学校家庭科1人1台端末を活用した授業づくり』明治図書
- ・ 勝田映子（2021）『小学校家庭科授業成功の極意』明治図書
- ・ 石井英真（2020）『授業づくりの深め方「よい授業」をデザインするための5つのツボ』ミネルヴァ書房

ふせんを模造紙にはってグループで話し合う活動は考えを整理するのに役立ちましたか。

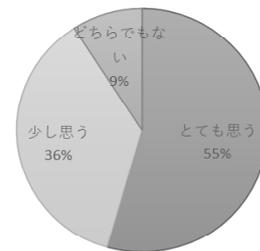


図16

振り返りをすると、次の時間やこれからの生活で「何をがんばればいいのか」がわかりますか。

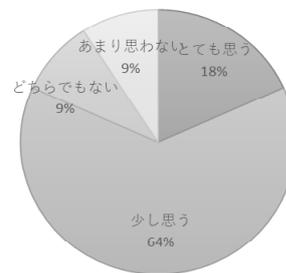


図17

既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～）

集	年度	内 容
30	平成 元	園外の地域環境を生かし、幼児の主体性を育てるための活動は、どのようにすればよいか 幼稚園第2ブロック共同研究 小規模校の特性を生かし、児童一人一人に応じた指導をめざして －学校・家庭・地域が一体となって－ 池田町 下野呂内小学校 「子どもが生き生きと取り組む、豊かな教育活動」－ふるさと意識を高めるために－ 山城町 山城小学校 明日を担う心豊かで自主性のある生徒の育成－ボランティア活動を通して－ 井川町 井川中学校 へき地の特性を生かし、一人一人がたくましく伸びる魅力ある学校の創造 －同单元類似内容の指導の試み－ 池田町 出合小学校 郡内家出少女についての考察 三好郡青少年育成センター 久原 啓治 樹木画に見られる心の世界Ⅱ－児童・生徒の理解と援助のために－ 三好郡教育研究所員 入江 宏明
31	平成 2	ふるさととの活性化をになう子どもたちの自発性をほりおこすために 西祖谷山村 善徳小学校 教諭 徳善 之浩 体験を通して豊かな心を育て、実践まで高める道徳教育 三加茂町 三庄小学校 教諭 吉田美千代 一人一人が主体的に取り組む、活力ある生徒の育成をめざして 池田町 池田第一中学校 教諭 小島 治子 西字小学校における生活科年間計画－平成4年度教育課程完全実施へ向けての新しい試み－ 山城町 西字小学校 教諭 内田三千代 英語指導助手（AET）とのティーム・ティーチングを通して －コミュニケーション能力の育成のために－ 池田町 池田中学校 教諭 木藤 康子
32	平成 3	主体的な生活を促す幼稚園教育－人とのかわりをとおして－ 第3ブロック幼稚園 池田町 川崎幼稚園 教諭 林 節子 馬場幼稚園 教諭 丸岡 明美 西山幼稚園 教諭 東川たつ子 子どもが主体的に取り組む特別活動－たて割り班の活動を通して－ 井川町 井内小学校 教諭 立川 義輝 自らが心身ともに健康な体づくりに取り組む児童の育成 －進んでむし歯予防に取り組む白地っ子を目指して－ 池田町 白地小学校 養護教諭 平田志津子 生徒が生き生きと活動するための手立てはどのようなであればよいか－学校行事などの活動を通して－ 山城町 山城中学校 教諭 佐藤英一郎 一人ひとりを生かす評価活動－学習意欲を高める理科の指導－ 三好郡教育研究所員 藤本 智恵
33	平成 4	主体性を伸ばし、実践力を育てる特別活動 －個性を重視した、たて割りグループによる児童集会活動を通して－ 山城町 大野小学校 教諭 上田 優 へき地小学校における性教育についての研究－性教育の実践を通して－ 東祖谷山村性教育研究会 和田小学校 教諭 松村 直也 ふるさとを愛する心の育成を目指して－体験的活動を通して－ 西祖谷山村 西祖谷中学校 教諭 篠原 一仁 中学校国語科書写における行書指導－行書を活用した筆写活動の日常化をめざして－ 三好郡教育研究所 研究員 岸 敬子
34	平成 5	健康でたくましい子どもの育成をめざして－主体的に取り組む活動－ 第3ブロック幼稚園 教諭 上林加津子 永田 協子 自然に感動し、主体的に学び続ける児童の育成 －一人一人の表現活動を高め、科学的な見方や考え方を育てる理科学習－ 三野町 王地小学校 教諭 安西 政和 自ら学び、自らきたえる心豊かな子どもの育成－ボランティア活動をとおして－ 三好町 昼間小学校 教諭 武岡 澄代

		<p>奉仕等体験学習を通して、思いやりのある心豊かな生徒の育成 池田町 池田中学校 教諭 古林 久代 英語指導を通して平和教育をすすめる一私案 -ピース・メッセージの実践を通して- 三好郡教育研究所 研究員 長谷 郁代</p>
35	平成6	<p>地域に開かれた学校づくり -すこやかな児童の育成をめざした、地域ぐるみで取り組む学校行事- 山城町 大和小学校 教諭 久保 満男 小規模校における環境教育の取り組み -教科、特別活動の実践を通して- 池田町 馬路小学校 教諭 細川 敬雄 地域とともにあゆむ生徒の育成をめざして 三好町 三好中学校 教諭 玉木 利典 選択履修の幅の拡大 -家庭科- 三好郡教育研究所 研究員 佐々木待子</p>
36	平成7	<p>主体的な生活を促す幼推園教育 -幼児が自分らしさを発揮して生活する環境と援助を考える- 第4ブロック幼稚園 山城幼稚園 蔵下美千子 思いやりのある心豊かな児童の育成をめざして -「いじめ」を許さない学校づくりへの取り組み- 三加茂町 加茂小学校 教諭 小笠 健二 「郷土を愛し、心豊かな児童の育成を目指して」 -体験学習・ボランティア活動を通して- 西祖谷山村 吾橋小学校 教諭 濱口 久弥 生徒会活動の活性化をめざして -自ら考え、行動する生徒会活動への教師の支援- 三加茂町 三加茂中学校 教諭 山西 敏広 生活に生きる書写力の育成を目指して -中学1年生への意識調査と実践例- 三好郡教育研究所 研究員 栗田 典子</p>
37	平成8	<p>地域に根ざした福祉・ボランティア教育 -施設訪問を通して- 井川町 辻小学校 細川 文男 『ふるさとを愛し、人間として主体的に生きる生徒の育成』 山城町 大野中学校 小学校国語の文法的事項の指導 -「何について」「どのように」「どこまで」指導するか- 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代</p>
38	平成9	<p>幼稚園において、幼児の興味や欲求に応じ、幼児とともに充実した生活をつくりだすためには、環境を どのように構成すればよいか 第1ブロック幼稚園 教諭 宮成 典子 物やお金を大切に、思いやりのある豊かな心を持つ児童の育成 池田町 三縄小学校 教諭 森本 明子 環境教育 Think Globally, Act Locally を目指して -積極的に環境と関わり、責任ある行動がとれる生徒の育成- 三野町 三野中学校 教諭 丸岡 美枝 学校不適應問題の諸相と教師の援助について 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子 学級担任の教師が行う教育相談 -ある不登校児とのかかわりを通して- 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代</p>
39	平成10	<p>身近な環境に意欲的にかかわり、よりよい環境づくりや環境保全に配慮した望ましい行動がとれる児童 の育成 山城町 政友小学校 教諭 大西公美子 一人一人の個性を尊重し、豊かな心と、『生きる力』を育むために -地域に育てられ、地域と共に伸びる生徒の育成- 東祖谷山村 東祖谷中学校 教諭 梶原真里子 今、子どもたちの心は? -三好郡内小中学生意識調査から- 三好郡教育研究所 研究員 吉岡 弘恵 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子</p>
40	平成11	<p>魅力ある幼稚園教育の創造 (三好町三園の取り組み) -生活体験や自然体験を通しての生きる力の育成- 三好町内幼稚園 ふるさとに立ち、たくましく生きる力をもつ、心豊かな子どもの育成 -名頃を見つめ、名頃を愛する学習を通して- 東祖谷山村 名頃小学校 教諭 橋本 隆 「人権感覚豊かな心」と「共に生きる力」を育む教育の創造 -「選択の時間」を生かした取り組みの中で- 井川町 井川中学校 教諭 内田 典善 授業の効果を高めるためのコンピュータ利用のあり方 三好郡教育研究所研究員 西井川小学校 吉岡 弘恵 英語科においてコミュニケーション能力を育成するために 三好郡教育研究所研究員 三好中学校 新居 信子</p>

41	平成 12	<p>「ひと・もの・こと」とのかかわりを通して、生きる力を育む王地学習 王地小学校 教諭 北川ひとみ</p> <p>自ら学び、自ら考え、主体的に行動する生徒の育成 -地域の特性を生かした取り組みの中で- 池田第一中学校 教諭 立花 久</p> <p>三好郡における情報教育の現状とその考察 -郡内小中学生・教職員の意識調査から- 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵 三好郡教育研究所 研究員 三好中学校 新居 信子</p>
42	平成 13	<p>「生きる力」を育む幼稚園教育のあり方 -幼児が自ら生活していくための教師の役割- 白地幼稚園 教諭 木徳 友子</p> <p>「ふるさとを愛し、共に学びあう心豊かな児童の育成」 -へき地の特性を生かした様々な体験活動をとおして- 東山小学校 教諭 高篠 佳子</p> <p>生きる力を養う生徒の育成 山城中学校 教諭 白井 正道</p> <p>TT授業や少人数授業を実施した徳島県の連絡協議会資料(平成12年度・13年度)から中学校数学におけるTT授業について考察する 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵</p> <p>自ら学び、豊かな心を育てる学校図書館についての研究 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵</p>
43	平成 14	<p>豊かな感性をはぐくむ教育の創造 -金子みすゞの心を活かした詩の指導をとおして- 三好郡教育研究所 研究員 西井川小学校 小角 昌美</p> <p>数学で基礎基本の力をつける方法をさがして 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵</p> <p>地域における教育ネットワークの活用とコーディネータの役割 -学校インターネット指定から始まった三好郡の教育ネットワーク- 三好郡ネットワークセンターICTコーディネータ 中川 斉史 生藤 元</p>
44	平成 15	<p>生きる力をはぐくむ幼稚園教育のあり方 -身近なものに興味を持ち、活動を豊かにするためには、教師はどのようにかかわればよいか- 吾橋幼稚園 教諭 山口 里子</p> <p>「生きる力」を育む総合的な学習 -ふるさとを愛し、人や自然と積極的にかかわろうとする児童の育成をめざして- 出合小学校 教諭 岡 佳子</p> <p>「ふるさとを愛し、豊かな感性を持ち、自らの力で未来を創造しようとする子どもの育成」 西祖谷中学校 教諭 富永 浩史</p> <p>「生きる力」をはぐくむ美術教育美術の基礎基本の力を身につけ、個性を生かす指導について -人として心豊かに生きていくことのできる力を育てるために- 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代</p> <p>生きる力をはぐくむ教育の探求 -「本との出会い」をとおして- 三好郡教育研究所 研究員 小角 昌美</p>
45	平成 16	<p>ふるさとの歴史や自然、文化にふれる活動を通して、自ら学び心豊かに生きる子どもの育成 下名小学校 教諭 高岡 和恵</p> <p>『地域から学ぶ「生きる力」の育成』 池田中学校</p> <p>「みる力」を育てる美術教育 -美術の基礎・基本をみつめて- 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代</p> <p>学校の情報化をどのように進めるか 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元</p>
46	平成 17	<p>幼稚園において、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、幼児の主体的な活動を確保するための物的・空間的環境をどのように構成していくか 第1ブロック 三野町・三加茂町幼稚園研究グループ</p> <p>地域や学校の特性を生かし、一人ひとりの『生きる力』を伸ばす生活科・総合的な学習の時間 絵堂小学校 教諭 鶴田 美枝</p> <p>地域や人に関わる体験的な活動を通して、自ら考える生徒の育成 三好中学校 教諭 野田 圭祐</p> <p>三好郡小学校における情報教育の現状について 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元</p> <p>文字式の指導に関する研究 -1年文字式における生徒の理解の仕方について- 三好郡教育研究所 研究員 上田 美恵</p>

47	平成 18	子どもの豊かな言語感覚を養う指導 -主体的により良く伝え合う力の育成をめざして- 西井川小学校 教諭 丸本 豊美 地域に学ぶ総合的な学習の時間 -共に生きる町づくりについて考えよう- 三加茂中学校 教諭 玉木 利典 三好郡・市の小学校における情報教育の現状 三好教育研究所 研究員 生藤 元
48	平成 19	「健全な心身の成長をめざして」 -高齢者や保護者とのふれあいや連携を図りながら- 第2ブロック 三野町・井川町幼稚園研究グループ 「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」自らの食生活に関心を持ち、す すんで健康づくりに取り組む子どもの育成 -学校・家庭・地域の連携した取り組み- 池田小学校 栄養教諭 大西 欣美 「確かな学力」を身につけさせるために -プレゼンテーション能力の育成とICT機器の利用- 三野中学校 教諭 中川 悌二 「グラフを書くのは何のため？」 -何でもかんでも「%」からの脱却で、知的な分析を- 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 「学校現場の生活を便利に工夫し能率化を図ろう」 -子どもたちに「創意工夫」の精神が大切なことを伝えよう- 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「中学校理科におけるICT機器の活用」 -評価活動におけるマークシートの利用- 三好教育研究所 研究員 山田 泰弘
49	平成 20	ふるさとを愛し、ふるさとを元気にする心豊かな子どもを育てる 椋生小学校 教諭 谷川 智彦 小規模校の良さを生かした修学旅行の実践 -『バスガイドさん・運転手さん・添乗員さんとのふれあい』を中心として- 東祖谷中学校 教諭 高崎 英和 授業カイゼンとICT活用 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 体育科における効果的なICT機器の活用について 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「小学校情報テキスト」の利用状況について 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 学級づくりにおける分析と対応の一考察 -構成的グループエンカウンターを考え方を生かして- 三好教育研究所 研究員 石丸 秀樹
50	平成 21	幼稚園での確かな学び・小学校での確かな学力をめざして -人やものとのかかわりを深め、豊かな感性や思考力の芽生えを育てる- 山城幼稚園 教諭 山中あけみ 池田幼稚園 教諭 大久保珠美 新しい学力観をふまえた学びの創造 -習得型学力から活用型学力へのステップ- 足代小学校 教諭 熊井 美樹 ボランティア活動を通じて生徒の自主性を育てる 井川中学校 教諭 村上 郁代 小学校外国語活動の現状と今後の在り方 -小・中における英語教育の連携を目指して- 三好教育研究所 研究員 藤本 恒幸 授業におけるICT活用の促進についての課題 三好教育研究所 研究員 福田 ミカ
51	平成 22	「人間力」を育てる総合的な学習の時間・生活科の創造 -人・地域との関わりの中で育つ豊かな学びの追求- 芝生小学校 教諭 小原 敏二 「ふるさとを愛する心」を育てる 山城中学校 教諭 内田 清文 実物投影機の活用目的の明確化 -実物投影機利用意図の可視化を通して- 加茂小学校 教諭 福田 ミカ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知の実態 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好郡市小・中学校における情報モラル教育の現状と課題 -三好郡市小・中学校学級担任アンケート調査と研究授業より- 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
52	平成 23	豊かな感性や思考力の芽生えを培う保育内容の創造 -小学校との連携の中で育つ「学びの芽生え」- 大野幼稚園 教諭 谷本 紀子 地域から学び、ふるさとを愛する心豊かでたくましい子どもの育成 -学びを生かし、自らを表現できる佐野っ子をめざして- 佐野小学校 教諭 山田 知弘 人や地域とつながり、協働できる生徒の育成 -「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」をとおして- 西祖谷中学校 教諭 西岡ひとみ

		三好市・三好郡の中学生の都道府県認知のイメージ 平成23年度三好郡市小・中学校学級担任の情報モラル教育 ーグループウェアによるアンケート調査と低・中・高学年研究授業よりー	三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
53	平成24	家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり ー小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学びー 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 ーE S D（持続発展教育）の視点を取り入れてー 三好郡・市小中学校における情報モラル教育 ー学級担任アンケート調査と研究授業よりー 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること	東祖谷小学校 教諭 森永 直美 池田中学校 教諭 丸岡 美枝 昼間小学校 教諭 山口 恭史 三好教育研究所 研究員 山下 達也 三好教育研究所 研究員 岡本 博一
54	平成25	豊かな心をはぐくむ幼稚園教育 ー様々な体験活動を通じて、地域の人々や同年齢、異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究ー 地域とともにある学校をめざして ー地域の教育力を生かして育てる三庄っ子ー 生徒一人ひとりの思いが尊重され、つながりを大切にする活動を通して 複式学級における指導の充実を目指して I C T活用の推進と情報モラル教育	昼間幼稚園 教諭 佐藤 重美 三庄小学校 教諭 三好美智代 三好中学校 教諭 近藤 剛 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 三好教育研究所 研究員 岡本 博一
55	平成26	家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践 ー多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践ー 豊かな心と、自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造 ー学校図書館を中心としてー 小中連携教育ー東祖谷小中学校の取り組み 複式学級におけるパソコンを活用した算数科の授業 社会科における思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫 ー討論活動を取り入れた授業づくりー	井内小学校 教頭 住田 克弘 三加茂中学校 教諭 山下ちづる 三好教育研究所 研究員 岡本 博一 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹
56	平成27	自分で気づき、考え、実行し、仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもの育成 ー地域との交流を通してふるさとの魅力再発見ー 出会いをつなぎ、自己を見つめ、自他の人権を尊重する生き方を求めて ー識字学級との交流を通してー 「読む知る感じる」読書環境をめざして ー学校図書館教育の実践と課題ー 児童・生徒の生活環境の改善を目指して ーネット端末（スマホ等）の使用時間を見直してー	箆蔵小学校 教諭 藤原 隆司 三野中学校 教諭 尾形 君代 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹
57	平成28	地域から学び、郷土を愛し、主体的にたくましく生きる児童の育成 ー様々な人とのかかわりや体験活動を通してー 「生きる力」を育む土曜授業実践の成果と課題 関わりの中で主体的に学び豊かな感性を育む鑑賞教育 ー見て、考えて、表して、意見を交わすー	山城小学校 教諭 井上 清隆 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 三好教育研究所 研究員 宮成万寿美
58	平成29	変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成 ー身近な自然や人とのかかわりをとおして しなやかな心と体をはぐくむ保育の工夫ー 豊かな心を持ち、未来に向かって主体的に行動する子どもの育成 ー一人一人のちがいを認め、助け合う仲間づくりを通してー 社会科デジタル教材の開発と活用 ーI C Tの有効な活用をめざしてー 生徒の意欲関心を高め、豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて ー美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通してー	西井川幼稚園 教諭 元木 真砂代 王地小学校 教諭 濱口 ミエ 三好教育研究所 研究員 常村 淳 三好教育研究所 研究員 宮成万寿美

59	平成 30	<p>自らの命を守り抜くために主体的に行動する態度の育成 ～実践的な安全教育の取り組みを通して～  <small>昼間小学校 教諭 久原 有里</small></p> <p>生徒の意欲関心を高め、豊かな感性を育成する主体的な学びについて  <small>～美術科におけるデジタル教材の作成と活用を通して～</small></p> <p>三好教育研究所教育研究所 研究員 宮成 万寿美（現三野中学校）  <small>興味関心を高め、基礎学力向上に役立つデジタル教材の開発と活用</small>  <small>三好教育研究所 研究員 常村 淳</small></p> <p>誰もが分かる、楽しい授業を目指して ～ICTの活用とUDを取り入れた授業の工夫～  <small>三好教育研究所 研究員 立花 志津</small></p>
60	令和 元	<p>小規模校における児童の資質・能力の育成 ～「何ができるようになるか」に焦点をあてて～  <small>白地小学校 教諭 小越 彩佳</small></p> <p>豊かなかかわり合いの中で、たくましく自立できる子どもの育成 ～15歳の旅立ちに向けて～  <small>東祖谷中学校 教諭 西野 猛</small></p> <p>オリンピック・パラリンピックを活用した教育  <small>三好教育研究所 研究員 中瀧 由紀</small></p> <p>安全で楽しい理科の観察・実験  <small>三好教育研究所 研究員 立花 志津</small></p>
61	令和 2	<p>豊かな体験活動から学びを拓き、深める吾橋教育 ～へき地・複式・小規模校の特性を生かして～  <small>吾橋小学校 教頭 井上 清隆</small></p> <p>表現リズム遊び・表現運動の指導の現状 –調査から分かったこと、研修会で学んだこと–  <small>三好教育研究所 研究員 中瀧 由紀</small></p> <p>小学校の授業で活用できるプログラミング教育教材  <small>三好教育研究所 研究員 橋本早弥香</small></p>
62	令和 3	<p>子どもの姿から考える幼小の接続について ～遊びから学びへ向かう子どもたち～  <small>三縄幼稚園 主任教諭 真鍋 友子（現白地幼稚園）</small></p> <p>持続可能な食環境（食育ベース）の構築と「食の力」を身に付けた児童の育成  <small>～「マスク・手洗い消毒・3密を避ける」だけじゃない！！『体の中からコロナ感染予防対策』～</small>  <small>辻小学校 教諭 大岩 彩菜</small></p> <p>低学年における「平仮名・片仮名」の読みの流暢性を目指して  <small>三好教育研究所 研究員 上野三千代</small></p> <p>プログラミング教育の普及と指導方法の探究 ～2年間の実践研究を終えて～  <small>三好教育研究所 研究員 橋本早弥香</small></p>
63	令和 4	<p>ポジティブな行動支援の手法を活かした授業改善の取組  <small>～「わかった」を「できた」にする算数科の授業づくり～</small>  <small>加茂小学校 教諭 久原 有里、  <small>教諭 森長 拓哉</small></small></p> <p>低学年における平仮名・片仮名の効果的な指導について  <small>～2年間の研究を通して～</small>  <small>三好教育研究所 研究員 上野三千代</small></p> <p>コミュニケーションを意識した英語力の向上にむけて  <small>～「十分に慣れ親しむ」ために～</small>  <small>三好教育研究所 研究員 リーデル章代</small></p>
64	令和 5	<p>小規模校の特性を生かした教育活動の推進  <small>～他校とのオンライン学習の実践を通して～</small>  <small>馬路小学校 教諭 中山 祐子</small></p> <p>変化する社会の中で、学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方  <small>～心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動～</small>  <small>三好市立井川中学校</small></p> <p>外国語学習から『学級づくり』  <small>～外国語の特性であるコミュニケーションを生かして～</small>  <small>三好教育研究所 研究員 リーデル章代</small></p> <p>主体的に運動する子どもの育成  <small>～「防災体力」を意識した体力づくりを通して～</small>  <small>三好教育研究所 研究員 松本 美穂</small></p>

65	令和 6	<p>ふるさと西祖谷に夢や誇りをもち、未来の創り手となる子どもの育成        ～へき地・複式・小規模校の特性を生かした学校・学級経営の深化・充実をめざして～        櫛生小学校 教頭 井内 康之</p> <p>主体的に運動する子どもの育成        ～「防災体力」を意識した体力づくりを通して～        三好教育研究所 研究員 松本 美穂</p> <p>別室登校の生徒たちの実際        ～アートセラピー的取組とそよかぜ学級～        三好教育研究所 研究員 井川 早苗</p>
66	令和 7	<p>自他を認め合い、多様な社会を心豊かに生きる子どもの育成        ～人・人・人とのつながりを通して～        芝生小学校 教諭 平尾 美和</p> <p>別室登校の生徒たちとのつながりづくり        ～アートセラピー的取組とそよかぜ学級～        三好教育研究所 研究員 井川 早苗</p> <p>よりよい「振り返り活動」を目指した学習活動の工夫        ～小学校家庭科学習における実践～        三好教育研究所 研究員 大倉 尚子</p>